
KUMA！ 最強伝説

G A Y A

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

KUMA！ 最強伝説

【Nコード】

N2056H

【作者名】

GAYA

【あらすじ】

弱小プロレス団体を率いる「グレート猪狩」は本物の熊をデビューさせることを決意する！果たして「熊五郎」は無事にリングに上がれるのか？猪狩の娘「鬪子」の恋の行方は？

第一話 熊が道場にやってきた！

プロローグ

いつになく真剣な父の表情に鬪子は一抔の不安を覚えた。

父、グレート猪狩は語る。

「時代は求めている！ 世界最強の格闘家を！」

十年前の全盛期ならイザ知らず、まさかその歳で自分が最強などとは言い出さないだろうが……。

娘の冷たい視線に構うことなくグレート猪狩は熱く語る。

「絶対的な強さ！ 圧倒的な存在感！ 俺はついに見つけた！」

それを真にうけて早速、パンダマンが「マジっすか！」と、目を輝かせる。

試合後のパンダマンは目の周りのメイクが汗で流れかけているのだから見かけ通りにマヌケな奴だ。

グレート猪狩はニヤリと笑って親指を立てる。

「で、近々そいつをうちのリングに上げる。スーパースターの誕生だ！ そして俺達の時代がやって来る！」

そこでレスラー達が一斉に「おおっ！」と、どよめく。

「シャチヨさん凄いデスネー」と、アシムが熱い視線を猪狩に送る。

「シャチヨさん最高！」と、ハマドも兄に続いて猪狩を絶賛する。

まったくもって『おめでたい兄弟』だ。大体このパキスタン人の兄弟は人を疑うということを知らない。普通に考えればそんな凄い格闘家がこんな潰れかけのプロレス団体のリングに上がるはずがないのだ。

鬪子は疑り深そうな目つきで父、グレート猪狩を睨む。

「で、どこの誰なのよ？ その最強の格闘家ってのは？」

すると猪狩は自信たっぷりに答えた。

「熊だ。本物の熊をうちのリングでデビューさせる！」

……長い沈黙。

まるでその場に居た全員の脳みそが一瞬で蒸発したように皆が皆アホ面を同時に浮かべた。

そんな中、唯一冷静なロシア人悪役のキラール・ロマノフが猪狩に聞き返す。

「ク、熊デスカ？ 熊ツテ、動物ノ？」

ロマノフの質問に猪狩が答える。

「当たり前だろ。熊といえば熊に決まってるだろうが！」

（熊をプロレス・デビューさせる？）

その馬鹿げた父の発想に鬪子が切れた。

「な、な、何考えてんのよっ！ バツカじゃないの？」

そんな鬪子の凄い剣幕とは対照的にのんびりした口調でハマドが口を挟む。

「シャチョさんは『パツカ』じゃないヨ。バカなだけヨ」

それを聞いた猪狩がさかさずハマドに掴み掛かる。そしてコブラツイストでハマドを締めあげながら宣言する。

「とにかく俺に任せておけ！ あてはあるんだ！ 必ずや熊をスパーンスターにしてみせる！」

鬪子は目の前が暗くなるような気がした。

（またこの馬鹿親父がとんでもないことを……）

鬪子の経験上、この後ろくでもない事になってしまうことは容易に想像できた。が、既に事態はとんでもない方向に進みはじめていた。試合後の控え室、正確には体育館の用具室に集合した面々の想像をはるかに超えて……。

* * *

移動用のマイクロバスで高速を乗り継ぐこと6時間。さらに山道を延々と進む。気がつけば周りはどこもかしこも大量の緑に覆い尽されていた。視界を埋め尽くす緑に圧倒された鬪子はすでに（ここ

はどこ?) 状態だ。多分、日本地図の一番緑っぽい箇所のだ真ん中を目指して闇雲に走っているのだろう。

出発して半日がかりでようやく目的地に到着した。到着したところは昔ながらの日本家屋。外観だけでは農家なのか林業を営んでいるのかは分からない。

からぶき屋根を見上げながら鬪子が呟く。

「凄……はじめて生で見た」

まあ、大きな家といえる。ただ、そもそもこんな山奥のそれも人里から隔離された場所に人が住んでいるものなのか怪しいものだ。

猪狩は長時間ドライブでグロッキー気味の鬪子を残してマイクロバスを降りた。そして疲れもみせずにはスタスタと胸を張って玄関に向かう。さすがプロレスラー。無駄に体力があるらしい。仕方なく鬪子も後に続く。

猪狩は開けっ放しの玄関にずいと足を踏み入れて怒鳴った。

「ごめーん!」

が、反応が無い。

猪狩がイライラしているとしばらくしてコントに出てくるような風貌の老人が「あーいよ」と、間の抜けた返事をしながら出てきた。老人を見て鬪子は思った。

(小さっ!)

普段、大男に囲まれた生活をしている鬪子にとって腰の曲がった老人はやけに小さく見えたのだ。

一方、老人は猪狩親子の姿をジロジロと眺める。

「あ? 誰だ、おめえ」

「あんたが小次郎さんか? 俺は伝説のプロレスラー、グレート猪狩だ!」

そう言っつてグツと胸を張る猪狩の隣で鬪子が顔を赤らめる。

(自分で伝説とか言っっちゃってるし……)

「はあ。電鉄の人だんべ」

「誰が電鉄の人だ! 伝説だ。デ・ン・セ・ツ!」

「こりやまたスツレイ。んだども、何でまたこんな山奥まで来なすつたど？」

「ここに人間に育てられた熊がいると聞いてきたんだが！」

「熊？ あー、ひよっどして『熊五郎』のことだんべか？」

目的の人物、もとい熊の名は熊五郎というらしい。

熊五郎という名前を聞いて猪狩が顔をしかめる。

「そ、そのまんまの名前だな。で、どこだ？ そいつは今どこにいる？」

「あゝ 熊五郎ならコタツでテレビみてるだ」

小次郎の意外な言葉に猪狩親子が「はあ？」と、同時にマヌケなりアクションをとる。

鬪子が顔を引きつらせる。

「コ、コタツでテレビって、そんな……」

「ま、オラについてくるだ」

そう言つて小次郎が猪狩親子を家に招き入れる。

玄関を上がつて、やたら幅の広い廊下を進んでいるとやがてテレビの音が聞こえてきた。

「ほれ。そこが居間だんべ」

小次郎に促されて猪狩が居間を覗き込む。

すると、コタツに入つて誰かがテレビを観ているのが目に入った。

正確に表現するなら『誰か』ではない。誰か、というよりは黒い物体だ。黒い物体がこちらに背中を向けているのだ。

それを見て猪狩は息を飲んだ。

続いて鬪子が居間を覗き込む。

(で、デカっ！ な、何アレ？)

一瞬、その奇妙な構図に思考が追いつかない。

コタツに足を突っ込み肩肘ついて寝転がる黒い巨体。黒くて大きくてもこもこしている。よく見ると確かに熊だ。いや、はじめに『熊』

と聞いていなければその物体が何であるのか恐らく理解出来なかつただろう。

突然、鬪子の膝が勝手に震え出した。おまけにアゴまでガクガク振動し始めた。

(く、く、く、クマだ。熊だ。本物の熊だ！)

熊は入り口で固まる猪狩親子の存在などまるで気付かず手を伸ばしてコタツの上のみかんをつまんで一口で飲み込んでしまう。

(く、熊がコタツでみかん！)

そんな光景を目の当たりにして啞然とする猪狩親子に小次郎が声を掛ける。

「遠慮せんと中に入ったらどうだべ？ 寒かるうて」

それを聞いて鬪子が首をブンブン振って激しく遠慮する。

「だ〜いじょうぶだつて。おい。熊五郎！」

小次郎に呼ばれて熊が「ガッ？」と、反応する。

「熊五郎よう。この人たつ、おめえに会いに来たんだ」

熊五郎はむっくり上体を起こして振り返る。そしてきよとんとした表情で首を傾げると、またテレビの方に顔を向ける。

(む、無視された……でも何をそんなに夢中で観てるんだろ?)

不思議に思っ鬪子が目を凝らす。

どうやらテレビでは野球中継をやっているらしい。

そこで小次郎が説明する。

「こいづ、熊のくせにタイガースのファンなんだ」

「本当にルールをわかってんのか？」と、猪狩が眉をひそめる。

「ルール以前の問題でしょ！」と、鬪子が猪狩に突っ込む。

だいたい熊がテレビに夢中になっていること自体あり得ない。まず突っ込むならそこだろうと思う。

その時、熊五郎が「ガッ！」と吠えた。

画面を見るとタイガースの四番がホームランを打ったようだ。

熊五郎は嬉しそうに右手でコタツをバンバン叩く。結構、豪快だ……。

(た、たぶん。画面の歓声に反応してるのよね……)

鬪子はそう思い込むことにした。熊が野球観戦なんて……あり得な

い！

そこで試しに尋ねてみる。

「まさか、ホントに野球のルールを理解してるとか？」

すると小次郎は鬪子の顔を眺めながら答える。

「こいづ、ちゃんと分かかってんだべ。さすがにスポーツ新聞は読まねえけどな」

(当たり前でしょ！)

と、鬪子が突っ込もうとする前に猪狩が反応した。

「おお！ それは良かった。敵味方の区別がつかないんではタツゲマツチの時に困るからな！」

本気でそんなことを心配していた父に鬪子はうんざりした。

「バツカじゃないの！」

それにしてもコタツでみかんとは……。つくづく呆れてしまう。

鬪子の呆れ顔を見て小次郎が説明する。

「こいづは自分のこと人間だと思ってるべ。なんせ生まれた時からずうつと家の中で暮らしてるからなあ」

さしずめ森の熊さんならぬ家の熊さんといったところか。

小次郎の解説に興奮を抑えきれない猪狩は突如、三つ指について小次郎に頭を下げた。

「む、息子さんを俺にくださいっ！」

それを聞いて鬪子がガクツとずっこけた。

(婚約者の父親にお願するんじゃないんだから……)

猪狩がいきなり土下座をするものだから小次郎が戸惑った。

「は？ こいづを？ 本気だべか？」

「是非スカウトしたい。彼なら必ず日本一、いや世界一の「格闘王」になれる！」

「あ？ 角砂糖？」

「違ーう！ かくとう王。カ・ク・ト・ウ・王！ プロレスで天下を取れるってことだ！」

プロレスと聞いて小次郎が「プロレス……」と、急に険しい顔つき

で考え込んだ。

緊張の一瞬。交渉が成立するかどうかの瀬戸際だ。小次郎の反応を見て心配になった猪狩が恐る恐る尋ねる。

「だ、ダメか？」

すると小次郎は「うんにゃ。いんでないかい」と、あっさり同意してしまった。

「よし！」

猪狩のガッツポーズを鬪子は複雑な心境で見つめた。

（交渉が成立して良かったんだが悪かったんだか……）

冷静に考えればこれは大変なことだ。ウチに熊がやってくるなんて事はそうは無い。鬪子にもそれはちょっと想像ができない。

「よし。それでは交渉成立ということで早速、一緒に来てもらおう」

「え？ 今からだべ？」

「ああ。その為にマイクロバスで来た」

「まあ、ええけど……ちょっと待ってケロ。オラの準備があるだ
て」

「何？ あんたも来るのか？」

「勿論だ。だつて、通訳が要るだべさ」

「なるほど。それもそうか」

（そこで納得するな！）という鬪子の心の叫びが届くはずも無く、結局、熊五郎と小次郎を乗せてマイクロバスは帰路につくことになった。

* * *

小次郎の家から山道を下ること小一時間。その道中で突然、鬪子の携帯が鳴った。

「もしもし」と、鬪子が電話に出るやいなや、

『だ、大丈夫かい？ 鬪子！ 良かった。やっと繋がった！』という声が耳に飛び込んできた。アツシが心配して電話をかけてきたの

だ。

「いや。大丈夫だから。一応……」

『ま、まさか熊に襲われたりしてないよね？ 大丈夫だよな？』

「だいたい襲われてたら電話出れないでしょ。てか、もつと最悪かも」

『さ、最悪つてなんだよ。ボクは鬪子が無事でさえいてくれればそれで……』

そこで電波が途切れた。携帯を見るとまた圏外になっている。

(ま、いつか。帰れば分かるでしょ)

そんな事を考えながら鬪子が小さくため息をつくとき、猪狩が運転しながら尋ねた。

「なんだ？ ハンサム・ボーイからか？」

「……ん。なんか心配で電話してきたみたい」

「フン！ 奴め。お前の事より自分の才能の無さを心配しやがれつてんだ！」

「酷っ。あれでもウチにとっては貴重な選手なんだよ」

「どうだか。ありや長続きせんぞ。動機が不純すぎる」

猪狩の言葉に鬪子がドキツとする。ちらりと父の横顔を盗み見するがハンドルを握っている猪狩の視線は前方に注がれている。まるで試合の時に相手のレスラーを睨みつけるような表情だ。

「別に……アツシとは何でもないんだから」

半分は言い訳、残り半分は自分に言い聞かせるように鬪子は呟いた。少しブルーな気持ちで窓の外を眺める。ふと何気にバックミラーを見ると熊五郎と小次郎が寄り添って眠っている。まるでおじいちゃんが見つ黒な掛け布団に包まれているように見える。微笑ましいながらも奇妙な光景だ。

* * *

結局、丸一日を費やして猪狩と鬪子は「道場」兼「合宿所」によ

うやく帰ってきた。

疲れきった表情で鬪子がノビをする。

「はぁ。やっと帰ってこれた……」

時計を見ると午前9時を少し回っている。この時間ならまだ朝練の最中といったところか。

(みんな練習中かしら？　こんなの見たらみんな引くだろうなあ)
そんな事を考えながら鬪子はシートベルトを外す。

猪狩はマイクロバスを道場の入り口に横付けする。

グレート猪狩が率いるプロレス団体「新日本グレート・プロレス」の本拠地でもあるこの道場は、もとはといえば倒産した精肉工場の倉庫だった。格安の家賃で借りられる代わりに駅からはほど遠く、周りの人口密度は悲しいくらいに低かった。その分ここに本物の熊がいても目立つことはないだろう。

バスのエンジン音を聞きつけて道場から何人かの選手達が出てきた。猪狩と鬪子がバスを降りて皆の出迎えを受ける。

「お疲れさまッス」と、素顔のパンダマンがおじぎをする。

「シャチヨさん遅かったネ〜　ご苦労さんダネ〜」と、アシムが馴れ馴れしく猪狩をねぎらう。

パンダマン、アシムとハマド、おむすび山、ロマノフ、南大門、副社長のケンちゃんと大体のメンツは揃っている。が、アツシの姿が見えない。

(あれ?)と、鬪子が怪訝に思っていると道場の中からアツシの「あっー!」という情けない呻き声が聞こえてきた。

(やれやれ……)と、鬪子が中を覗き込む。

するとリングの上でアツシが白熊君に関節技をかけられている最中だった。

そこで猪狩が集合をかける。

「おい！　みんな集まれ〜!」

それを聞いてリングの上の2人も練習を中断する。

「痛テテ」と、腰をさするアツシの格好悪い姿を眺めて鬪子は小さ

くため息をつく。

皆が入り口に集合したところで副社長のケンちゃんが尋ねる。

「社長。お疲れ様でした。で、見つかったんですか？」

「おうよ。スカウト大成功だ！」

猪狩の言葉を聞いて一堂が「おおっ」と、どよめいた。

それを見て猪狩はニヤリと笑う。

「じゃ、皆に紹介しよう！ スーパースター候補の熊五郎だ！」

そう言っつて猪狩はマイクロバスのドアを勢いよくスライドさせた。

皆の視線が集中する。緊張が高まる。

そこで後部座席から熊五郎がひよっこり顔を見せる。意外にあどけないその表情に若干、緊張が緩む。ところが、器用にバスから降りてきた熊五郎が、その全身を見せた瞬間、皆がズツと数歩後ずさりする。

「で、で、で、でかつ！」と、パンダマンが目を剥いた。

「アワワワ」と、ハマド兄弟が抱き合っつて震える。

それを見て猪狩がフォローを入れる。

「心配すんな！ 大丈夫だ。こいつ、見かけは熊だが……いい奴だ」

それでは全然フォローになっていない。

（見かけだけじゃなくて本物の熊なんですけど……）

鬪子はゲンナリしたが口を挟むような雰囲気ではない。

マイペースな猪狩は続いて熊五郎の後から降りてきた老人の紹介をはじめめる。

「で、こつちが通訳の小次郎じいさんだ」

猪狩に紹介されて小次郎がぺこりと頭を下げる。

「皆さんよろしく。まんず、オラ田舎者なんでちょっと緊張すています」

小次郎があいさつするのを見て熊五郎が「ガッ！」と、短く吠えた。すると小次郎がすかさず通訳をする。

「気に入った。汚ねえとこだけど悪くない、と熊五郎は言ってるべ」

（絶対言っつてないと思っつ……）

多分、皆も鬪子と同じ感想をもったのだろう。小次郎のうさぐさい通訳に誰もが眉をひそめた。が、猪狩はそんなことはまったく気にしない。

「そういうわけで今日から熊五郎と小次郎じいさんが仲間になった。皆も気合入れていけよ！」

そんな猪狩のゲキに対して「ウィイツス……」と明らかにテンションが下がった答えが返ってくる。選手達が戸惑うのも無理はない。なにしろ今日から熊と生活しろというのだから……。

解散の号令をかけようとした猪狩が何かを思い出した。

「ああ、そうだそうだ。おい白熊！」

「はい？ 何でしょう」と、先程アツシに技をかけていた白熊君が返事をする。

「お前、リングネーム変えろ！ キャラが被るから」

猪狩にそう宣告されて白熊君が青ざめる。

「ええっ！ そんな〜 やつとこのキャラに慣れてきたのに」

もともと色白で太っているからという理由だけで猪狩がつけた名前なのだ。今更ネーミングを変えろと言われても無理がある。

「しよーがねえだろ。熊五郎と白熊君じゃ紛らわしいだろ」

「そんなあ。じゃあボクの名前はどうなるんですかあ？」

白熊君に懇願されて猪狩がしばし考える。で、出した答えは単純明快。

「なら、「太った人」でいいんじゃないか」

「そんないい加減な……」と、半べそをかく白熊君。

それを鬪子が慰める。

「ごめんね。アタシがいい名前考えてあげるから」

ずっと年下の鬪子に慰められる白熊君、もとい「元白熊君」をハマド兄弟も励ます。

「ボクラもいつしよに考えてあげるヨ〜 例えばサ「白ブタ野郎」

トカ〜」

「ダメダヨ兄ちゃん。「白豚クン」の方がカワイイヨ〜」

傷口に塩を塗りこむようなハマド兄弟のコメントを鬪子が一喝する。
「あんたらは黙ってなさいっ！」

まったく先が思いやられる。ただでさえ手間のかかるヘンテコ集団に今度は本物の熊だ。経営者の娘として、これからも彼らの面倒を見なければならぬと思うと鬪子はうんざりした……。

しかし落ち込んでばかりもいられない。実質この会社を切り盛りしているのは鬪子なのだ。鬪子が動かなければ何も進まない。

(まずは……食費が心配だわ)

熊五郎の巨体が頭に浮かんだ。確かにあの凶体では他のレスラーの五人分ぐらい食べてもおかしくはない。それと、ここで寝泊りするとなると……。

「あ、部屋どうしょ」

さすがに熊と相部屋させるわけにもいかない。

「あー！ 頭痛い……」

鬪子が頭を抱えているとアツシが「大丈夫かい？」と、声を掛けてきた。

アツシが腰をかばいながら歩くのを見て鬪子が呆れる。

「ケガ人に心配されたくないんですけど」

「平気だつて。ちよつと休めばすぐ良くなるさ。オレ、鬪子よか若いし」

「何言つてんの。同級生でしょ。変わらないじゃない」

「それもそうだな」

そう言つてあどけない笑顔をみせるアツシはまだ18歳。つい半年前までは高校生だったのだ。それがどういつつもりか卒業後にグレート猪狩に弟子入りしてしまったのだ。本人は鬪子と一緒に居たいからだと言つものの、どこまで信じて良いかは分からない。

「けどさ。鬪子も大変だね。まさか本当に熊を連れてくるなんてな」

「……まったく頭痛いわよ。ただでさえ経営苦しいのに」

「そもそも熊つて普通の家で飼つてもいいものなのか？ 法律違反じゃねえの？」

「さあ？ その辺はアツシにも分かんない」

正確には都道府県知事の許可を貰って基準を満たした飼育設備で飼うぶんには法的に問題ない。ただし熊五郎のように野放しというのは論外であるが。

「じゃ、オレ練習戻るわ。鬪子も無理すんなよ！」

アツシはそういい残して爽やかに去っていく。まるで女子の憧れの的であるイケメン選手が練習に戻る時のように。

（格好良いんだけど……なんだかなあ）

確かに猪狩がリング名を「ハンサム・ボーイ」としただけのことはある。

そんなアツシに言い寄られている自分は幸せだと鬪子は思う。なのに本気になれない自分がある。まるで曇りガラス越しに空を見上げた時のように何かクリアではないのだ。

アツシの後姿を見送りながら今日も鬪子は胸の中の痛みを押さえつけた。チクチクと棘が触れるような小さな痛みを……。

第二話 闘え！ 熊五郎

経営者にとって給料日ほど憂鬱な日は無い。とりわけ経営が厳しい会社の経営者ならみんなそう思うだろう。

そういうわけで給料日の闘子はいつもとキャラが違う。というよりキャラを変えないと精神的にやってられないのだ。

試合後のミーティングで闘子が給料タイムを高らかに宣言する。

「ではでは今月の給料を配りまーす！」

カラ元気というよりヤケクソに近いノリで気まずい時間を乗り切るうという作戦だ。

普通なら貰う側のテンションは上がるはずなのだが、今月の興行成績が厳しいことは皆知っているので大した反応はない。

「はい。じゃあ、キラー・ロマノフ選手からどうぞ〜」

闘子に名前を呼ばれて『ロマノフ』が給与袋を受け取りに前へ出る。

ロマノフが一礼してそれを受け取ろうとすると闘子の手元で給与袋もペコリとお辞儀を返す。

次に大道芸が得意技の『南大門』が呼ばれて給与袋を受け取ろうとする。するとやっぱり袋がペコンと中折れする。それだけ中味が薄いのだ。

(こんな安月給で……みんなゴメンね)

そんな時に闘子の胸は強く痛む。いくら住む処と食事が保障されているとはいえ、収入の少ない月の給与は悲惨の一言に尽きる。それでも辞めないで猪狩についてくるのには他に何かがあるのだろう。しーんと静まり返った控え室に副社長の声が響いた。

「よっしゃ！ 来月は稼ぐぞ！」

副社長の『ケンちゃん』は小学生の頃からの猪狩信者だという。この会社にとって本当にありがたい存在だ。

「皆頼むよ。来月再来月は秋祭りが目白押しだからね。ここでしっ

かり稼いでおこう！」

ケンちゃんのフォローのおかげで選手達がようやく顔をあげた。やはり明るい未来を提示しなければ元気など出てこないのだ。

「ガッ！」

そこで熊五郎が突然吠えた。

皆が驚いて振り返る。

すかさず熊五郎の隣に立っていた小次郎が通訳をする。

「諦めるな。お前たちは決して負け組みではない、と熊五郎は言うてるだ」

（絶対言つてねえ〜！）

いつものハツタリ通訳に一同は苦笑いを浮かべる。やがて苦笑いは笑顔に変わり、いつの間にか明るいムードが復活していた。

「熊ゴローは面白いネ〜」と、アシムが熊五郎を指差して笑う。

「でも、チョットけもの臭いけどネ〜」と、ハマドが鼻をスンスンいわせる。

「違うヨ兄ちゃん！ それはボクのシューズの匂いだヨ〜」

そう言つてアシムが脱ぎたてのシューズをハマドの鼻先に近づける。そこでハマドが大きさに鼻をおさえて「臭っ！」と、転げ回るので笑いの渦がますます大きくなる。

そんな光景を見て鬨子の憂鬱も少し晴れた。

（良かった……）

小さいけれどアット・ホームなところ、それがこの団体の良いところだ。

* * *

リングの後片付けを終えたハマドとアシムが野外のベンチで一息ついているところに鬨子が差し入れを持ってやって来た。

「はい。お疲れさまっ」

「お〜 トーコさん。ありがとネ〜」と、ハマドが嬉しそうにジュ

「スを受け取る。」

「どーしたのヨ？ 今日のトーコさん、メツチャ、サービス良いデスネ〜」と、アシムが驚く。

「いいのよ。さっきは助かつちゃったから。アタシのおごりよ。」

「ナンダカ良く分からないケド、いったただきマ〜ス」と、ハマド。

「儲かったネ、兄ちゃん」と、アシムも満面の笑み。

鬪子は先程の給料タイムを明るい雰囲気にしてくれた2人に感謝の意を示したつもりだった。が、天然ボケ兄弟はよく意味が分かっているらしい。

グビグビと喉を潤す2人の横顔を見ながら鬪子が尋ねる。

「ね。前から聞いたかつただけだよ。アシムとハマドは国には帰らないの？ 何でお父さんについてきてくれるの？」

鬪子の質問にハマド兄弟は顔を見合わせた。そして珍しく神妙な口ぶりでアシムがぼつりと口を開いた。

「尊敬シテルからヨ」

「え？ それだけ？」

意外そうな顔をする鬪子の顔を見てハマドが説明する。

「子どもの時見たシャチヨさんは超カツコ良かったヨ」

ハマドの説明では20年ほど前に猪狩がパキスタンで異種格闘技戦に挑戦した時にハマド兄弟は試合を生で観ていたらしい。その時に猪狩にあこがれたというのだ。

「でも『ハサン』とかっていう地元の英雄をボコボコにしちゃったんでしょ？」

「イイノ、イイノ。ボクたち兄弟は知ってた。ハサンは悪い奴。とんでもないゲソ野郎ヨ！」
「パカだなアシムは。ゲソ野郎じゃないヨ。それをいうならゲリ野郎ヨ！」

「それ、あなた達のネタ？」

この兄弟の場合どこまでがネタでどこまでが天然なのか時々分からなくなることがある。もっともそれが試合でもウケている理由でもあるのだが。

「トニカク、僕たち兄弟はシャチヨさんが好きネ」
そう口を揃える2人の表情を見てみるとその言葉には嘘は無いように思えた。

* * *

熊五郎が道場に来てから一週間が経った。

「そろそろ人にも慣れてきただろう」

ということ、いよいよプロレス技を仕込むことになった。

リングの横では二本足で立った熊五郎がボケくつと練習風景を眺めている。

それを見ながら猪狩とケンちゃんが今後の方針について話し合っている。

「しかし社長。大丈夫ですかね？」と、ケンちゃんが心配そうに熊五郎を見る。

「何がだ？ 体力は申し分ないだろ」

「いえ、体力はともかく技を使うには手が短いような気が……」

ケンちゃんが心配するのは熊五郎の腕の短さだった。しかし、猪狩は意に介さない。

「強ければ問題ないだろ」

「やはりプロレス技で人間と組み合うのは難しいですね」

「やってみなきゃ分からないだろ。よし！ スパーリングの準備だ」

「え？ いきなりですか！」

「実戦で鍛える！ それがグレート流だ」

「し、しかし誰が相手を？」

「任せる」

「はあ……」

社長命令では仕方が無い。そこでケンちゃんはレスラー達を集めて熊五郎の対戦相手を募集した。

「誰か立候補する者は？」

しかし誰一人手を挙げる者は居ない。それどころか「よっしゃ。いくぞ！」と誰かの掛け声でジャンケンを始める始末だ。

その結果『おむすび山』が、めでたく熊五郎のパートナーに任命された。

おむすび山はつぶらな瞳をウルウルさせて訴える。

「お、おで……まだ死にだぐねえ」

そこでケンちゃんがおむすび山の坊主頭をポンポン叩いて勇気付ける。

「大丈夫だ。お前の石頭なら」

ケンちゃんの言うように、おむすび山の最大の武器はその石頭だ。おむすび山は相撲の経験者ではあるが彼の石頭には定評があった。何しろぶつかり稽古で横綱の前歯を折ったぐらいである。

まず、おむすび山が先にリングに上がり、続いて熊五郎がリングに上がる。

猪狩は腕組みしながら余裕のポーズでそれを見守っている。皆が注目する中、いよいよ熊五郎の実力が試されるのだ。

カーン！ とゴングが鳴らされた。

おむすび山は怯えた様子でリングの端っこでモジモジしている。まるでトイレを我慢している幼児のようだ。とても自分から仕掛ける感じではない。

リングサイドに陣取った他の選手達は無責任にも「行けよ！ オラ！」と、おむすび山をけしかける。

「社長！ すっげえ威圧感っすよ！」と、パンダマンが猪狩に逐一報告する。

「フフ、熊だからな」と、猪狩は得意顔。

「社長！ パンチが効きません！」

「フフン。熊だからな」

「社長！ 関節技がまったく効きません！」

「フツ、なにせ熊だからな」

猪狩は満足げにパンダマンの報告に答える。ところが……。

「社長！ おむすび山の頭を齧ってます！」

「く、熊だからな」

「社長！ 重すぎてリングの床が抜けました！」

「く、熊……だからな」

「社長！ ポストにマーキングしてます！」

「く、熊だから？ な……」

段々と猪狩の顔が引きつってくる。これではまるで試合にならない。

「ええい！ 俺がやるっ！」

ついに猪狩がしびれを切らせてリングに駆け上がった。

「いいか！ 俺が闘魂を見せてやるっ。来い！ 熊五郎！」

猪狩はファイティング・ポーズを取った。相手が誰であろうと全力で闘う。それが猪狩のポリシーだ。

しかし猪狩のやる気は完全に空回りだった。なぜなら肝心の熊五郎が猪狩に興味を示さないのだ。

まったく戦う気が無い熊五郎は、リングのポスト（支柱）にお尻をこすりつけて熱心にマーキングしている。

さすがの猪狩もそれを見て呆れ返った。

「ダメだこりゃ……」

いくら強くても戦う意志が無ければ試合にはならない。熊五郎の場合、あまりに人間に近いせいかわ生の闘争本能が少なすぎるのかもしれない。

なかなか上手くはいかないものだ……。

第三話 恋と闘魂

副社長のケンちゃんは「なんでも屋」だ。

会場の設営、資材を運ぶトラックの運転手、広報、マッチメイク、そして実況中継まで、裏方の仕事をなんでもこなすマルチな人だ。特に試合の実況中継はとても大切だ。これがあるのと無いのでは雲泥の差がある。試しにテレビのスポーツ中継を音声無しで観てみるといい。実況中継とは、単に試合内容を伝えるだけでなく、選手の紹介をしたり試合を盛り上げたりする為の重要なスパイスなのだ。

そのケンちゃんが今、第3試合の見所を観客に解説している。

「さあ注目の第3試合は、あの男の登場です！ 姉さん母さんおばあちゃん。女性の皆さん。大変お待たせしました！ いよいよあのイケメン選手の登場ですっ！」

そこで会場が暗くなる。すかさず入場曲、ビバルディの「四季」が鳴り響く。スポット・ライトが赤コーナーの花道を照らします。アツシの出番だ。

「さあ観客の皆さんご注目！ 我が新日本が誇るナンバーワンのイケメン選手！「ハンサム王子」の入場ですっ！」

ケンちゃん言葉の合図にアツシが元気よく花道に飛び出す。が、いかんせん入場曲がクラシックなのでミスマッチ感は拭えない。さらに観客の笑いを誘うのがその衣装だ。ピンクのパンツにピンクのシューズ。赤いマントに手作り感まるだしの王冠。おまけに口には赤い薔薇を一本くわえている。なんともチープな王子さまだ。（演出だからしょうがないけど……なんだかなあ）

アツシの入場シーンを見るたびに闘子は思う。もしかしたら、このビジュアルのせいなのかもしれない。闘子がアツシの求愛を受け入れることができない原因は……。

闘子がそんなことを考えているとはつゆ知らず、最近のアツシは結構そのキャラを楽しんでいるようにも見える。

「続いて対戦相手の入場です。ハンサム王子に対するは「狂犬」犬マスク」だあ〜！」

なぜ「狂犬」の後に「？」がつくのかは謎だが、一日に3部程度しか売れないパンフレットにもしつかりそう書かれている。そこは選手の数足りないこの団体ならではの事情がある。実はこの犬マスク、パンダマンのひとり二役なのだ。お尻に着いた尻尾がまったく同じなのでバレバレのだが、その辺りはケンちゃんの中継でもしつかりネタとして織り込まれている。

「おおっと、この犬マスク。どっかで見たことあるような……」と、突っ込まれてリング上の犬マスクが慌てて顔を隠す。

そこですかさずケンちゃんが追い討ち。

「あれあれ？ あの尻尾？ なんだあー？ パンダマンの尻尾と同じなのか？」

するとパンダマンがさらにアタフタと慌てふためく。つまり頭かくして尻隠さず。ケンちゃんがリング上の選手をイジるのは「お約束」である。

「まさに頭隠して尻尾隠さず！ お前は犬なのか？ パンダなのか？ 究極の優柔不断男め〜！」

優柔不断な男は女の子に嫌われるが、さすがにこの二択は有り得ないだろう。

「それでは試合開始ですっ！」

カーン！ と、ゴングを鳴らすのもケンちゃんの役割だ。

茶目つ気たつぷりのキャラが、ほどほどにコミカルに、ごくまれに真剣勝負、というのが新日本グレートプロレスの「売り」だ。そんな中でも入門半年のアツシなどはまだまだ新米で「やられ役」しかやらせてもらえない。そういうわけで今夜の試合も見せ場は作るが最終的には「半ケツ」をさらして犬マスクに完敗するというのがアツシの役割だった。

アツシの唯一の見せ場はコーナーポストの上からジャンプして頭突

きを決めるところだ。

「おおっと！　ここでハンサム王子がポストに登って……飛んだあ
く！　必殺ハンサム・フラッシュ・ヘッドバットだあ！」

一応、派手なピンク色をまとった人間が長距離を飛んで頭から敵に突撃するサマはインパクトがある。が、見せ場はこれだけ。その後、調子をこいたハンサム王子が二発目を狙う為にもう一度ポストに登ろうとしたところに……。

「お？　もう一発狙うのか？　ここでハンサム王子がスルスルとポストに登つ……ああっと！　犬マスクがそれを許さないっ！」

犬マスクが王子のパンツに噛み付いてそれを阻止する。

哀れパンツを引つ張られた王子は半ケツをさらして転落。
そして最後に犬マスクの大技「ワンワン・パラダイス」が決まって
フィニッシュ！

* * *

試合終了後、アツシは控え室でアゴを冷やしていた。

「おお……まだ痛えや」

そこへ闘子が様子を見に来る。

「ね、大丈夫？」

「ああ。パンダ先輩のドロップキック……まともに受けちゃった」

「首を振るタイミングが遅いんだよ。あれじゃ直撃じゃない」

「分かってるけど……まだまだかな」

そう言つてアツシが首を振る。

闘子のアドバイスは続く。

「それと最後の受身ね。ブレンバスターは足で衝撃を受けないと腰
にくるよ。ちゃんと膝曲げてる？」

「うーん。忘れてたかも……」

「ダメね。それじゃ幾つ身体があっても足りないよ！」

闘子はそう言つて笑いながらアツシの肩をバンと叩く。

「い、痛てえつてば！ 強いよ鬪子は！」

アツシは軽く睨む真似をする。が、すぐに笑顔になって続ける。
「なあ鬪子。オレ、ちよつとは遅しくなつたつしょ？」

アツシが見つめてくるものだから鬪子は少しドギマギした。

「ま、まあまあね。うん。前よか筋肉はついてきてると思うよ」

「けど、鬪子にはまだ敵わないんだろうな。けどさ。俺、いつか必ずもつと強くなってお前を……」

(やっぱりそう来たか)

アツシがこんな風に話しかけてくる時は大抵……。

鬪子はちよつと引きつった笑顔で逃げる。

「あ、試合終わりそう。持ち場に戻らなきゃ」

それを見てアツシは不満そうな顔をする。

「チエツ！ またそれかよ」

「さ、お仕事お仕事」

鬪子は複雑な心中を悟られないようアツシに背を向けて出て行った。控え室に残されたアツシもそろそろ次の仕事に取り掛からなければならぬ。この小さな団体では選手といえども試合後の一休みを除いては裏方の仕事をこなさなくてはならないのだ。

アツシが鬪子の後姿を見送ってぼんやりしていると、ふいに背後で

「ガガツ」と、熊五郎が笑ったような気がした。

「熊五郎……おまえ、今笑つたな？」

アツシが熊五郎に言いがかりをつける。

「ガ？」

きよとんとした熊五郎の顔を見ているとなんだか気が抜ける。

「まさか、おまえも鬪子を狙ってるんじゃないだろうな？」

「ガ？」

「こいつめ！ 鬪子はおれのもんだぞ」

そう言つてアツシがふざけて熊五郎にハンサム・フラッシュ・ヘッドバットを仕掛ける。が、熊五郎はまるで八工叩きで八工を叩き落とすようにそれを片手で叩き落としてしまった。

最後の試合も無事に終了して会場はフィナーレを迎えようとしていた。

リング上ではグレート猪狩がマイクを持って観客に呼びかけている。「今日は来場ありがとうー！ 差し入れも沢山ありがとうー！ いやー食料は助かる。ホント助かる。また必ずこの町に来るから！ そんな時はまた来てくれえー！」

今でこそ落ちぶれたものの猪狩には未だに熱心なファンが多くついている。今では信じられないことだが二十年前にはテレビのゴールデンタイムにプロレスが放送されていたのだ。それが人気低迷と共に深夜枠に追いやられ、ついには放送すら無くなってしまった。しかし、古き良き時代に一世を風靡したグレート猪狩といえば、オールドファンにとっては今でもカリスマなのだ。

「それじゃ皆さん！ いつものアレ、行くぞおー！」

猪狩の掛け声で観客が一斉に立ち上がる。今日は3000人ぐらい客が入っているので皆が一斉に立ち上がるとそれなりに盛り上がる。それを見て猪狩が満足そうに頷き、雄たけびをあげる。

「それじゃせーの！ いーち……にーい……さーん……サアッー！」
猪狩と一緒に拳を突き上げていた観客から温かい拍手が沸き起こった。所々から「いかりー！」というダミ声も聞こえる。

鬪子はこのシーンを見るが一番好きだった。規模は小さいながらもこの一体感を演出できるのはさすがだと思う。そういうわけでこれが父を尊敬できる唯一の瞬間なのだ。これがなければとくに親子の縁を切っている。何しろ出生届の名前欄に「鬪魂」と本気で書いたぐらいのバカ者なのだ。5年前に亡くなった母がその時、機転を利かしてくれていなかったら今頃、鬪子の名前はとんでもないことになっていたのだ。名前が「鬪魂」なんて、いちいち女である事を説明しなくてはならないではないか。

会場が暗くなり流れるはホタルの光。観客を見送る段階になって闘子はやっと一息つくことができる。

(…………ふう。とにかく今日も無事に終わったなあ)

今日は結構客が入ったし、来月からは書き入れ時の秋祭りが沢山入る。そんな具合で何とか細々とやっていける、とこの時の闘子は思っていた。まさかこの後、バカ親父のせいでこの団体が窮地に陥るなどとは考えてもいなかったのだ……

第四話 やるっきゃないの？

熊五郎は人懐っこいクマだ。頭をなでて怒らないし膝に乗っても平気。名前を呼べば「ガ！」と返事をするし、同意を求めると「ガ〜」と頷いてくれる。

その中でもトイレが自分で出来るということ。これはやっぱりタダモノではない。道場のトイレはさほど広くないので止む無く壁を一枚取り除いた。が、動物の世話で一番大変なのがフンの始末だということを考えれば熊五郎ほど手のかからない奴はない。さすがに外をプラプラ散歩させるわけにはいかないが、人と同じように食べて、皆と同じように寝る。

そういう訳で熊五郎が来てから三週間、いまではみんな熊五郎とごく普通に生活をしている。

自分は動物嫌いだと公言するパンダマンでさえ、

「おれ、犬や猫はダメだけど、熊なら大丈夫かも！」

などと自分が動物呼ばわりされていることを棚に上げてのたまう始末。

そんなある日、ピンチは急にやってきた。

道場での練習が終わりかけた頃、入り口のところでおこんばんは「という気持ちの悪い声でした。

オカマのセールスかと思って鬨子が声の主を確認する。

「どちらさまでしょうか？」

「まいど、おおきに。わては『マサオ・ファイナンス』の人間どす。ちよいと社長さんに用があるんですわ」

関西弁にしては大阪と京都が混ざったようなイカサマ臭い方言だ。

「社長って……留守ですけど」

「おやおや。さいでつか。それは困ったどすなあ」

そう言って小首を傾げるその男、見るからにまともな職業の人間ではない。ファイナンスということは多分、金貸しなのだろうが、な

んせ着ている服がいただけない。スーツは銀色のダブル、シャツは青、ネクタイは外国の毒蛇みたいな柄……。それに何だか顔が魚っぽい。

(ていうかフナ?)

鬪子が怪訝そうな顔をしていると、フナの親分がブランドもののポーチから名刺をぬつと取り出した。本人はスマートに名刺を抜き取ったつもりなのかもしれないが顔が魚っぽいので少し気持ちが悪い。

それをしぶしぶ受け取った鬪子が名刺を読み上げる。

「借りたい貴方に、貸したいアタシ、いつもニコニコ。マサオ・フアイナンス」……」

「つまりそういうことでんねん。はよう社長さんに返してもらわんと」

「はあ。で、父は幾ら借りてるんですか？」

「あんた社長の娘さん？ まいどおおきに」

「まいどつて！ アタシは別に……」

そんなの関係ないと鬪子が言うより先にフナの親分が営業スマイルをみせる。というよりそのまじいツラでは営業妨害スマイルである。「猪狩トウコさん！ あんたしっかり保証人になつとりまつせ！」

「保証人？」

意味が分からず鬪子がきよとんとしていると一緒に話を聞いていたロマノフが鬪子に耳打ちした。

「保証人トハ、借りテル人ガ借金ヲ返セナクナツタ時ニ責任、取ル人ノ事デス」

「マジで？ そんなの初耳なんですけどっ！」

それを見てフナ親分がポーチから契約書をペロンと取り出した。

その瞬間、鬪子は思い出した。3ヶ月ぐらい前に猪狩に何かの書類にサインとハンコを求められた。確かあの時、猪狩はボランティアの申し込みだと言っていた。

(あのバカ親父〜！)

フツフツと怒りが湧いてきた。が、金額欄を見た瞬間、鬪子の頭のネジが一斉に抜け落ちた。

「え？ ゼロがひいふうみ……ゼロが7個って？ 何ですかあ？」
「せや。全部で八千万。で、今日は半分ぐらい返してくれるんでっか？」

「無理っ！ ケタが4つぐらい違うし！」

「そうはいかへんで。そんなじゃ、中で待たしてもらうさかい」

フナ親分はそう宣言するとぺたぺたと道場内に足を踏み入れた。いやらしい目つきでジロジロと室内を見回す親分。きつとあれは金目の物がないか物色しているのだろう。

「いや、しかし困るでホンマ……」と、よそ見しながら歩いていた親分がボスツと熊五郎の腹にぶつかつた。

「なんや？ 行き止まりかいな？」

「ガツ」

「ガつてなんやねん。ガつて……」

ひよいと上を見上げた親分の目が点になる。

「ガ？」と、熊五郎が（誰だこいつ？）といった顔をする。

「ク、ク、クワツ、クワツ……」

フナ親分がアヒルみたいな鳴き声でパニックに陥る。

さらにそこで熊五郎がフナ親分の頭に噛り付いたからたまらない。フナ親分の絶叫が道場に響き渡る。

慌てて鬪子が止めに入る。

「く、熊五郎！ それシヤケじゃないから！ フナだから！」

5人がかりで何とか熊五郎を親分から引き離して事なきを得たもののフナ親分の怒りは収まらない。

「な、何ですのん？ 金返せへんからって何の真似や？」

さすがに悪いと思つて鬪子が一応、謝る。

「驚かせちゃつてごめんなさい。まあこれには訳が……」

「訳やて？ そんなもん知るかいな！ さつさと金出しいな！ 金や金。金持つて来んかいっ！」

金、金とわめき散らすフナ親分を見て鬪子はうんざりした。それを察して熊五郎を抑えていたハマド兄弟とロマノフが一斉にはっと手を放す。

それを見て親分が「あひいっ！」と、後ずさりする。そしてビビリながらも憎まれ口を叩く。

「あんたらそれ犯罪やで！ 八千万は返さん。おまけに脅迫や。訴えられてもええんかいな！」

するとどこからともなく「金なら返す！」というドスの効いた声がした。

皆の視線が声のした方に集中する。

「シヤチヨさん！」「社長！」「バカ親父！」

いつのまに帰ってきたのだろう。猪狩は自信満々に言う。

「八千万だか八千円だか知らんがそのぐらいまとめて返してやるさ！」

「な、なんやて？ あてはあるんかいな？」

「勿論だ。そこに金の卵が居るだろ？」

そう言う猪狩の視線の先には……熊五郎！

信じられないといった表情でフナ親分が猪狩と熊五郎を見比べる。

「は？ あんさん頭大丈夫でつか？ この熊が金の卵？」

フナ親分の馬鹿にしたようなその言い方に熊五郎が「ガッ！」と、反応した。

そこですかさず小次郎がいつもの調子で翻訳する。

「見くびるな！ 人は見かけによらない、と熊五郎は言っているだ」

（絶対言つてねえ〜！）と、そこで話がぶつた切れる。

なんだか妙な流れになってきた。

猪狩は多額の借金を一発で返すと言い切る。それも熊五郎を使つて……。

鬪子はだんだん不安になってきた。

（まさかとは思つけど……やっぱ熊五郎を？）

フナ親分が疑いの目を猪狩に向ける。

「ホンマでつかあ。そら金さえ返してもらたら文句はありまへんけどな」

猪狩はフンと鼻を鳴らしニヤリと笑った。そして、鬪子の不安は的中した。

「こいつを来月デビューさせる！ 大イベントだ。凄いことになるぞ」

それを聞いて鬪子は天を仰いだ。

(やっぱり諦めてなかったんだ……)

猪狩の無謀な計画にシーンと静まり返る場内。何のリアクションもない。

「猪狩はん。悪い事は言わん。ものごとは計画的にせなあかんで」
高利貸しの親分がご利用は計画的にというのも説得力は無いがー理はある。だいたい、無名の熊がデビューしたぐらいでさほど話題になるとは思えない。

「猪狩はん。この熊にサーカスでもやらせはるつもりでつか？ それじゃお客はんなんぞつきまへんで！」

フナ親分の最もな疑問に鬪子以下、他のレスラー達もうんうんと頷く。

すると猪狩は皆の顔を見回して、一呼吸置いてからこう言った。

「熊五郎の対戦相手が……マックス徳山でもか？」

「ええっ？」と、いう驚きの声が湧き上がった。

「まじっすか？」「それは凄い！」「そりゃ大イベントだ」

さっきまで胡散臭そうに猪狩を見守っていた面々の顔つきが一気に変わった。

マックス徳山

その懐かしい名前に鬪子は頬を赤らめた。

(ゴン兄ちゃん……)

急に楽観的なムード漂う中、ひとり流れに乗り遅れたアツシが尋ねる。

「マックス徳山って、あのテレビで有名な？」

「そうダヨ〜 CMとかイパイ出てる人ヨ」と、ハマドは笑顔で答える。

しかしアツシには納得がいかない。そんな有名人とこの弱小プロレスの関係が分からない。

「けど、そんな売れっ子の人が、ウチのイベントなんかに出てくれるんすかね？」

そんなアツシの素朴な疑問にアシムが答える。

「マックスはシャチョさんの弟子なんだヨ〜 5年ぐらい前まではボク等と一緒にここで働いてたあるヨ〜」

「まじっすか！」

それでアツシも納得した。マックス徳山がこの団体の出身だといふならあり得ない話ではない。が、気になるのが鬪子の反応だ。マックスの名前を聞いた時、鬪子が嬉しそうな顔をしたようにアツシには見えた。その表情は恋する乙女のそれだ。と、アツシは勝手に解釈した。そして激しく嫉妬した。

「鬪子の奴まさか……」

いよいよ熊五郎の格闘家デビューが近付いてきた。それも相手は時の人マックス徳山！

風雲急を告げるとはまさにこのことか……。

第五話 デビューへの道のり

マックス徳山こと「徳山権一」は歌って踊れる人気格闘家である。はじめはイケメン格闘家として売り出されていたのだがテレビのクイズ番組に出演した時の天然ボケぶりがウケて今ではモデル、俳優、歌手として大人気のタレントになっている。

「社長、マックスに連絡取れました」

ケンちゃんの報告を聞いて猪狩がニツと笑う。

「で、奴は何て？ オファーは出したんだろ？」

「はっ、やはり難色を示しておりました」

「だろうな。だが奴は断れない」

「ですね」

そう言つて猪狩とケンちゃんは顔を見合わせて女学生のようにくすつと笑いあつた。

この2人には何か秘策があるらしい。そうでもなければ売れっ子タレントが熊と戦うなんてオファーを受けるはずがない。

猪狩とケンちゃんは勝手に計画を進める。

「しかし社長。問題は会場の確保ですね」

「できるだけデカイとこにしるよ。最低でも一万人は動員だ」

「ですが大きければその分使用料の前払いも高額になりますし、許可の問題が……」

「許可だと？ なんだそりゃ？」

「熊五郎ですよ。熊は猛獣ですから。会場を借りるには色々と制約がありますね」

「イザという時は俺がなんとかするさ」

そんな具合で猪狩とケンちゃんが社長室にこもつてから2時間が経過した。この計画は社運を賭けた一大イベントだ。その分、打ち合わせも念入りにやっているのだろう。

その頃、台所では鬪子とおむすび山が晩御飯の準備をしていた。

「鬪子さん……おで……」

おむすび山がふいに話しかけてきたので鬪子は包丁を止める。

「どうしたの？ そんな顔して」

おむすび山がひき肉を混ぜ合わす手を止めてうなだれる。

「おで……怖い」

おむすび山にもプレッシャーが伝わっているのだろう。それだけ今回のイベントは大変なことなのだ。

「ま、なるようになるでしょ」

と、半分自分に言い聞かせる鬪子におむすび山が不安そうな顔を見せる。

「おで、あたま悪いから……しごとなくなると困る。おにぎり食べれないの困る」

「ただだけおにぎりが好きなんだと思いつながら鬪子が慰める。」

「大丈夫だって。仮に今度のイベントがすべってもまたゼロからやり直せばいいじゃない。もともと小っちゃいんだし。すぐにやり直せるよ」

そう言っではみたものの鬪子だって不安で仕方ないのだ。おむすび山だけでなく、この団体が潰れたら選手は皆、路頭に迷うことになってしまう。

そんな事を想像したら不覚にもポロリと涙がこぼれた。

「ごめん。ちよつと鍋見てて」

鬪子は慌てておむすび山に背を向けると台所の裏口から外へ出た。後ろ手で扉を閉め、そのままたれかかる。

悪いことはなるべく考えないようにする。空を見上げながら涙を乾かす。

「鬪子……」

名前を呼ばれて我に返る。が、今はアツシにこんな顔を見せるわけにはいかない。

鬪子は顔をそむけて素っ気なく返事をした。

「なに？ 夕食はまだだよ」

「……分かるよ」

アツシの言葉に鬪子のはっとする。

「アナタに何が……」と、反論しかけて失敗したと思った。これではもろに泣き顔を見られてしまうのではないか。

「無謀だよな。失敗したらどうしてくれるんだ」

アツシの言葉に鬪子は無言で頷いた。

いつもと違う様子の鬪子に戸惑いながらアツシが続ける。

「けどよ。鬪子のせいじゃないから。もし失敗しても、誰も鬪子のこと恨んだりしないから」

鬪子は上目遣いでアツシの顔を見た。何か言わなくてはと思うが言葉が浮かばない。

「悪いのは社長なんだからさ。そんな時はそんな時で皆で社長をボコボコにしてリセットしてさ。で、はいもう1回、ってトコかな」

「もう1回って……アナタも？」

「あつたりめえだろ！ オレは何回でも立ち上がってみせるぜ！」

アツシが『やられキャラ』でなければその台詞にももっと重みがあったかもしれない。が、今は素直に鬪子の心に響く。

「でも……アナタの実家が許さないんじゃない？」

「は？ 親父やお袋は関係ねえ。別にオレが会社継がなきゃなんねえってことはないさ」

「一人っ子なんだからそうもいかないでしょ。だって昔から「帝王学」叩き込まれたって……」

「いいんだよ。帝王学だか低脳学だか知らんが、オレはここに居たいんだ。鬪子と一緒に……」

鬪子の気持ちが大きく揺らいた。弱っている時にズルイと思う。

(こんな時にそんな事を言われたらもう……)

その時、やたらと表が騒がしいことに気付いた。

何だろうと思つて鬪子とアツシも表に回ってみる。すると道場の前に立派なベンツが停まっているのが目に入った。

ハマドが鬪子の姿を見つけて報告する。

「と、トーコさん！ 来たヨ。マックスが来たんだヨ」

「え？ ゴン兄ちゃんが？」

マックスは真っ直ぐ社長室に向かったというので鬪子も急いで後を追う。

2階に上がって突き当たりの部屋が社長室だ。

マックス自らが足を運んできたということは予想していた以上に計画は進行しているのだろう。

「し、師匠！ そりゃないっすよ！」

部屋の外まで声が聞こえてきた。何やらもめているらしい。

ドアを開けようとして鬪子は躊躇した。

「無理ですって！ こっちだって忙しいんっすから」

それはテレビで見るマックス徳山の声だ。

鬪子がノックをして部屋に入ると大男3人が応接セットで向かい合っていた。

「なんだ鬪子か。茶など要らんぞ」

猪狩が鬪子を見てあごをしゃくる。

それを聞いてマックスがすっくと立ち上がる。

「鬪子ちゃん？」

マックスは鬪子に歩み寄るといきなり鬪子を抱き寄せた。

（あ！）と、思った瞬間、がっしりとした、それでいて優しい圧力に包まれる。決して嫌な感覚ではない。むしろ懐かしい……。

「ホントに大きくなったね。それにキレイになった」

上のほうからそんな言葉が降ってきた。鬪子の顔は辛うじて胸板の高さにある。

（前はお腹のとこまでしか届かなかったのに……）

それだけ鬪子の身長も伸びたということなのだ。

「いやあホントにキレイになったね。お母さんも綺麗だったけどそ

れ以上だ」

（お母さんよりキレイ？ アタシが？）

マックスが自分の母親にほのかな恋心を抱いていたことを鬪子は知っていた。あの頃の複雑な感情を思い出して鬪子は胸が苦しくなっていた。

（ゴン兄ちゃんはますます格好良くなったな）

マックスがこの道場で修業していた頃、鬪子はその存在を遠く感じていた。それが今はどうだろう。売れっ子になってしまったマックスはさらに遠い存在になってしまったような気がした。

マックスの温もりに顔を埋めながら鬪子は久しぶりの再会を噛み締めた。

が、そんな幸せな時間を猪狩のダミ声がぶち壊す。

「おい！ いつまでくつついてんだ？ 金とるぞ金。10分300円な」

（安っ！）と、思いながら鬪子が猪狩を睨みつける。

そこでケンちゃんが事務的な口調でマックスに確認する。

「では明日までにそちらの予定を電話で知らせるように」

マックスは鬪子から離れながら「分かりましたよ」と、面倒そうに答える。

猪狩は足を組み替えながらフンと笑う。

「しっかし随分、出世したもんだな。来月までスケジュールが一杯とはな」

マックスが不敵な笑みを浮かべて言葉を返す。

「おかげさまでね。これも師匠のご指導のナマモノですよ」
鬪子が眉を潜める。

（ナマモノ？ 賜物では？）

せつかくの胸キュンに水を差すこの天然ボケ。さすがマックスの語学力の程度はクイズ番組で立証済みだ。

「言っとくがギャラは安いぞ」と、猪狩が念を押すとマックスは涼しい顔で答える。

「もてから期待してませんよ。それより約束は守ってくださいよ」
鬪子が不思議に思つて「約束つて何？」と、尋ねると猪狩とケン
ちゃんがニカツと笑つて声を揃える。

「お・も・い・で・のアルバム」

「何それ？」と、鬪子にはまるで意味が分からない。

「ちょ、ちよつと師匠！ それとケンちゃんさんも！ マジで止め
てくださいよ〜」

マックスの狼狽ぶりを見る限り、その『思い出のアルバム』とい
うのは甘いか淡いかとは正反対のものなのだろう。

「わかつてるな徳山。本気でやらんとお仕置きするぞ。バナナで！
猪狩の言葉にマックスが青ざめる。

「や、止めてくださいよ師匠！ 思い出したくもない。それ、オレ
のドラマーなんすから！」

（ああ……『トラウマ』ね。やっぱりゴン兄ちゃんてば変わってない
のね）

猪狩はニヤリと笑う。

「言つとくけど熊五郎は強いぞ！ ……たぶん」

「フツ。負けませんよ。相手が熊だろうとヤギだろうと。ま、せい
ぜいこちらも利用させてもらいますよ」

「セメント勝負（真剣勝負）だぞ？」

「望むところですよ！」

猪狩とマックスの視線がぶつかる。もう勝負は始まっているのだ。
しばらく睨み合ったところでマックスが時計を見る。

「さて。そろそろ行かなくちゃ。この後もTVの収録があるんで」
「そうか。せいぜい今のうちに働いとけ。それと試合の後の予定は
全部キャンセルしておいた方がいいぞ」

「冗談を」

そう言つて歩き出そうとしたマックスが鬪子の顔を見て何かを思
いつく。

「そつだ師匠。もうひとつ条件だしてもいいですか？」

「なんだ？ ギャラなら2万以上は出せんぞ」

「いや。ギャラなんてどうでもいいんすよ。ただ、もしオレがその熊太郎に勝ったら……」

（熊太郎じゃないんだけどなあ）

そう思いながら鬪子はマックスの顔を恐る恐る見る。

するとマックスは真剣な表情で信じられない言葉を口にした。

「もし、オレが熊ジローに勝ったら……鬪子ちゃんを嫁にもらいます！」

それを聞いて鬪子は絶句した。

（嫁……嫁？ 嫁〜！）

その聞きなれない単語がグルグルと頭の中をまわる、まわる。

「いいだろう。好きにしろ」

猪狩は猪狩で簡単に言ってくれる。

（アタシが？ ゴン兄ちゃんのお嫁さんに？）

その時、バターンとドアが開け放たれ、バタバタと人が折り重なるのが目に入った。まるでブレーメンの音楽隊みたいだ。下から順番にアツシ、アシム、ハマド、パンダマン。どうやらこの連中、今の会話を盗み聞きしていたらしい。

マックスは鬪子にウイंकを残して、ひょいと人間トーテムポールを避けるとさっさと部屋を後にした。

マックスが廊下に出ると他の選手たちに混じって熊五郎がぬうつと突っ立っている。

それを見てマックスがニヤリと笑う。

「やあ。キミが熊ザブロー君か。よろしくね」

そう言っつてマックスはポケットから右手を抜いて握手を求めた。

が、熊五郎は「ガ？」と、首を捻る。そして、マックスの手を見て「ガ」と、右手を前に伸ばした。が、その手はしっかりとマックスの頭の上に……。ちょうど犬がお手をするような具合でマックスの頭に手を置いた熊五郎が「ガ」と、唸る。

さらに小次郎のいい加減な通訳が火に油を注ぐ。

「気をつける。毛根が悲鳴をあげている、と熊五郎は言っているだ」
「なんだか馬鹿にされたようでマックスは怒りを押し殺す。
「ま、負けないからな。熊シロー君。覚えておきたまえ！」
そう言っつてマックスは熊五郎の手を払いのけると苦虫を噛み潰し
たような顔つきで階段を降りていった。

マックス徳山と熊五郎。

ここに新たな因縁が芽生える。決戦の時は近い……。

第六話 闘魂スイッチ

リングで大の字になる熊五郎。

リング下でアツシが熱い声援を送る。

「立て！ 立つんだ！ 熊五郎〜！」

しかし熊五郎は起き上がらない。

「頼む！ 立つてくれ！ お前だけが頼りなんだ！」

アツシの悲壮感溢れる叫びも熊五郎には届かない。それどころか「ガ〜」と、半分あくびのような唸り声を上げてゴロンと寝返りをうつ始末。

いくらアツシが檄を飛ばしても熊五郎はゴロゴロとリングの上で寝転がるばかり。

そんな練習風景を見てケンちゃんが呆れる。

「相変わらずですね。熊五郎のやる気のなさは」

さすがの猪狩も厳しい表情で唸るしかなかった。

「うーむ。しかし、なんであいつは南大門の言うことしか聞かないんだ？」

「どうやら熊五郎は南大門を尊敬しているらしいです」

ケンちゃんのお返事に猪狩が首を捻る。

「意味が分からん。で、その南大門は？」

「はい。もうすぐ買出しから戻ってくるはずですが」

ケンちゃんのお言葉通り、しばらくして南大門が闘子と買出しから戻ってきた。

「おい南大門！」

「何です？ 社長」

「熊五郎は幾つ技を覚えたんだ？」

「はあ……いまのところ3つですかね」

猪狩がイライラしながら尋ねる。

「それじゃ少なすぎだ！ 熊五郎に火、吹かせろ！」

「無理です」と、南大門が即座に否定する

「じゃあ、何でもいいからおまえの特技を仕込め！」

猪狩に命令されて南大門は考え込んでしまった。

「私の特技……ですか」

南大門は元々、大道芸人であった。だが、どこでどう間違ったのか猪狩の弟子になってしまった。火を吹く、傘で皿を回す、お手玉、ジャグリングと、どれをとってもその芸は超一流だ。もちろん試合ではまるで役に立たないが。

「とにかくもつと技のレパートリー増やせよ。お前が熊五郎のトレーナーなんだからな！」

「はい。了解しました」

南大門は買物袋を鬮子に預けてリングにあがる。

ぱつとパーカーを脱げば、その下には筋骨隆々の肉体にタンクトップが食い込んでいる。プロレスラーたるもの、いつでも身体が動かせる服装をするのは常識だ。

「さあ熊五郎。練習だ」

ひんやりしたリングの感触を全身で堪能していた熊五郎が「ガ！」と反応する。

南大門を尊敬している熊五郎は、ひょこつと起き上がると「気をつけ！」の姿勢をした。

「よし。じゃあ覚えた技の復習だ」

「ガッ！」

さすがに敬礼はしないが自分が教えられているという自覚はあるらしい。

「まずは、熊パンチ100回！」

「ガ！」

さつそく熊五郎が右手を前に。そして丁度「コッスン」とゲンコツを食らわすような動作でパンチを繰り返す。

パンチといっても腕から先しか使っていないので威力は無さそうに見える。が、熊五郎のパワーなら見た目以上のダメージを与えるこ

とができるのだ。

熊五郎は「ガッ」と、熊パンチ1発ごとに掛け声を出す。が、数を数えているわけではないので何回やったか分からなくなってしまふ。結局、延々と「ガッ、ガッ、ガッ」とパンチを打ち続けるハメに……。

「おらおらどうした。まだ半分もいつてないぞ！」

本当はとつくに100回を越えていても南大門はわざとパンチを続けさせる。途中で疲れた熊五郎が南大門に（まだ？）と、いうような目で訴えるが、そこは厳しいプロレスの世界、簡単には許してもらえない。

ずっと同じことを繰り返す熊五郎と南大門の練習風景を見てアツシがため息をつく。

「ホントに大丈夫かなあ……」

熊五郎には何としてもマックスに勝ってもらわなければならないのだ。

アツシは心配になって南大門に懇願する。

「南大門先輩！ 熊五郎に必殺技とか教えてやってください！ 例えば、一発で相手の顔をへちゃむくれにするとか、男性機能を喪失させるとか」

「無茶言つな。まずは基本だろう」

「そんなこと言わずにお願いしますよお」

鬪子を奪われたくない一心のアツシにとって今の熊五郎は何か物足りない。熊だから強いことは分かっている。しかし熊五郎の場合、どうも鬪争本能が欠落しているような気がするのだ。

熊五郎の鬪魂スイッチはいったいどこにあるのだろうか？

* * *

マックスが勝手に熊五郎との対決を承諾したことに対してマネージャーは激怒した。

「ど、どっちでボクに黙ってそんな約束をちてちまうんでしゅかあ
〜！」

舌つたらずなマネージャーの説教にマックス徳山はうんざりした。

「うるさいな。社長の許可は得てるよ」

「でもでも……相手は熊でしゅよ？」

マネージャーの喋り方は舌つたらずを通り越して赤ちゃん言葉にしか聞こえない。

「怪我したらどうしゅるんでしゅか？ マックスしゃんはどうなってもいいでしゅけどボクが社長に叱られてしまいましたしゅ」

しかも『ジコチュー』ときた。見た目が子供でなければとつくにぶつ飛ばしているところだ。

「男はな！ 戦わなくてはならない時があるのさ。これは俺の美顔なんだ」

それを言うなら「美学」なのだろうが当然のようにマックスは過ちに気付かない。そこはこのマネージャーも慣れっこなのであえて突っ込まない。

「まったく困ったちゃんでしゅね〜」

なんだか小さい子が叱られているみたいでマックスは不愉快になった。

「しつこいな。お前もオレのマネージャーならちつとは俺の実力を信用しろよ〜！」

「マネージャーじゃありません。マネジャ、でしゅ」

この童顔マネージャー、どうやらそこだけはこだわりがあるらしく「マネジャ」の発音だけはなぜかネイティブ・イングリッシュなのだ。

世の中分らないものだ。この小学生がダブダブのスーツを着たよ
うな童顔男がT大卒の25歳というのだから……。

そこで控え室のドアがノックされて「本番お願いしま〜す」と、A
Dがマックスを呼びに来た。

やれやれと腰をあげてマックスがスタジオに向かう。だいぶん慣れ

てきたとはいえ、この童顔マネジャと一緒に居るほうがずっと疲れ
てしまう。

「いつてらっしゃーい」と、笑顔でマックスを送り出すと、童顔マ
ネジャはきりりと表情を引き締めた。

「そういうことでちたらボクが試合を潰してやるでしゅ」

童顔マネジャはPCで電話番号を検索してどこかに電話する。

「もちもち。そちらはF市の保健所さんでしゅか？ ……いえ。イ
タズラではありまちなん。実はでしゅね……」

電話は一箇所では終わらない。

「もちもち。そちらは動物愛護団体でちゅか？ ……いえ。子ども
電話相談ではありまちなん。実はでしゅね……」

どうやらこの童顔マネジャは、マックス対熊五郎の試合を妨害する
為にあちこちに密告の電話をしているらしい。

「ふふふ。ボクみたいに出来るマネジャは常に先手先手を打つもの
なのでしゅ」

* * *

皆で夕飯を食べた後に休憩室でテレビを観ていた時、ちよつとし
た騒ぎが発生した。

「おっ、満塁か。阪神チャンスじゃん」

そう言いながら風呂上りのパングダマン（もちろん素顔だ）がテレビ
を囲む連中の輪に入ってくる。

「一打同点だね」と、アシムがニヤニヤ笑う。

「面白ク、ナツテキマシタネ」と、ロマノフが笑顔で頷く。

熊五郎が大の阪神ファンだということを知っているので、皆、熊五
郎の様子を面白がっているのだ。

その熊五郎といえばテレビの前にでーんと陣取って画面を凝視して
いる。あぐらをかいてソワソワしているところなんか普通の人間と
変わらない。

そこでパンダマンが画面に映る観客席を真似て熊五郎をからかう。

「かつとばせえー！ 熊五郎！」

「ガ？」

熊五郎が振り返ったので、ビール片手に他の連中も熊五郎コールを送る。

「かつとばせえー！ くつま五郎！」

すると驚いたことに熊五郎がいきなり立ち上がってバットを振る真似をしたのだ。もちろん手には何も持っていないのでスイングをする動作だけだ。

「おお〜！」

熊五郎のパフォーマンスに皆やんやの大喝采。

それに気を良くしたのか熊五郎は「かつとばせえー 熊五郎！」の掛け声の度に両腕をブウンと振り回す。

そうこうしている間にジャイアンツの投手交代が終わり、代わったばかりの投手がタイガースの四番に対峙する。

立ち上がっていた熊五郎は素振りを止めて画面に集中する。

熊五郎以外の人間は別に阪神タイガースを応援している訳ではないのだが自然と緊張感がみなぎる。

一球目、二球目はともに判定はボール。熊五郎はおとなしく見ている。

三球目はストライク。やはり熊五郎はぴくりとも動かない。

そして四球目。投手の放った変化球を打者が豪快に救い上げた！

「打ったあ〜！ これは大きい！」

アナウンサーが叫ぶと同時に熊五郎が「ガァァ！」と、立ち上がった。

そのまま打球はスタンドへ。

「ホームラン！ 逆転満塁ホームラン！」

興奮した熊五郎は、元白熊君が座っていたイスの背中をバンバン叩く。熊五郎のパワーで叩かれたイスが地震のように揺れて座っていた元白熊君が転げ落ちる。

「良かったな。熊五郎」

「熊五郎の素振りが効いたかあ？」

「阪神やるネ」

皆が熊五郎を祝福する中、イスから転がり落ちた元白熊君だけはふてくされた顔だ。

色白の肌をピンクに染めながら元白熊君が吐き捨てる。

「ふざけんな……阪神なんかクソだ」

酔っているせいか目が据わっている。あまりに熊五郎たちがはしゃぐものだから、熱烈なジャイアンツファンの元白熊君は面白くない。

「チクシヨ！ 阪神なんかなあ」

そう言つて元白熊君は何を思ったか、熊五郎が肩にかけていた阪神タイガースの球団旗を模したバスタオルを奪った。そして、いきなりそれをクシヤクシヤにしてポイと放り投げた。

突然の出来事に熊五郎はその暴挙を茫然と見守った。そして……

「ガッ、ガガッ、ガー！」

熊五郎がこんなに長く喋るのははじめてのことだ。

明らかにいつもと違う。

熊五郎の只ならぬ異変に皆が驚く。

「な、なんだなんだ」

「熊ゴロー、どうしたのヨ？」

「ガーツ！」

熊五郎はいきなり元白熊君に熊パンチをお見舞いした。

ふいをつかれた元白熊君の頭がまるでバネに吊られた重りのように何度も揺れた。

「ガ！」

次に熊五郎は元白熊君を正面から抱きかかえると真上に向かってぽいつと投げ捨てた。

「この技は！」と、南大門が唸る。

哀れ、熊五郎に投げ捨てられた元白熊君は天井にしこたま頭をぶつ

け、尻から床に落下した。

「この技は……バンザイ・ドロップ！」と、アツシが目を輝かせる。そう、この技は、投げ終わった後の体勢がバンザイの形になるのでその名前がついているのだ。勿論、抱きかかえた相手を真上に投げなんてよっほどの力がないと出来ない芸当ではあるが。

「やればできるじゃないか！」と、南大門も拳を握り締める。

「凄いヨ〜 凄すぎるヨ〜」

「いやぁ実戦でも使えるんじゃないか！」

ハマドもパンダマンも熊五郎の新技に興奮する。誰も元白熊君のことを心配していないのはご愛嬌か……。

ところが熊五郎の怒りは収まらない。壁に穴を開けるわ、休憩室の大きなテーブルをちゃぶ台みたいに豪快にひっくり返すわ、暴れること暴れること。

次第に皆の顔が恐怖で引きつる。

「やべ……暴走モードだ」

そう呟いたパンダマンにも危機が迫る。なぜなら熊五郎がパンダマンに噛り付こうとしたのだ。

「危な……」と、誰もが息を飲んだ瞬間だ。どこからともなく、マヌケなうめき声というか民謡のコブシのような歌が流れてきた。

「ぞーうさん ぞーうさん おーはなが ながいのね」

それと同時に嵐のような音がピタリと止んだ。

「?!」

訳が分からず皆の目が点になった。

するとどうしたとか、熊五郎がゆらーり、ゆらりと歌に合わせて身体を揺らしはじめたではないか！ それも恍惚の表情を浮かべてゆーらゆーら、右に左にゆーらゆーら。ちゃんとリズムも合っている。何が起こったというのだろうか？

やがてその歌声が小次郎のものだということが判明した。

「ガ〜」と、熊五郎がごちそうさまの時と同じような声をあげた。

熊五郎の暴走が収まったのを確認して小次郎が歌うのを止めた。

「いや」間に合つて良かったべ。いったいどうすただ？」

小次郎に聞かれてロマノフが答える。

「ドウヤラ、元白熊君ガ、熊五郎ヲ怒ラセタミタイデス」

「そつが。だつたら最初から教えとけば良かったな」

「何を？」と、南大門が首を捻る。

「コイツ、熊の癖に童謡が大好きなんだべ」

「ドウヨウって何ヨ？」と、アシムが口を挟む。

「パツカだネ」アシムは。ドキドキすることヨ」と、ハマド。

「違つてシヨ兄ちゃん。ウナギを食べる日のことダヨ」と、アシム
土用の丑の日を知っていたことは褒められるが今はボケをかます場
面ではない。

小次郎が熊五郎の尻を撫でながら目を細める。

「コイツはな。昔つから童謡聞くと心が落ち着くんだ。特にぞうさは大好きみてえだ」

(熊なのに……ぞうさん好きかよ)
しらつとした空気が流れた。

「だども。オラが歌わねえどダメなんだけどもな」

小次郎の説明を聞いてパンダマンがあきれる。

「にしても本当に変な熊だな。小次郎じいさんの歌でなきやダメだ
なんてさ」

まったくその通りだ。熊五郎の場合、どこにスイッチがあるか分からない。どこに地雷があるかも分からない。

しかし、一連の騒ぎを見てアツシだけは冷静に分析を続けていた。
そしてある確信を持った。

「あつたぞ……熊五郎の闘魂スイッチ……」

大晦日でもないのにアツシの心の中でベートーヴェンの第9が鳴り響いた。

第七話 二こころの準備

何しろ急に決まった試合なので結局、大きな会場は押えられなかった。その結果、決戦の舞台に選ばれたのがF市の市民体育館。世紀の一戦の舞台としてはいささかシヨボイ場所になってしまったものの、猪狩の行動は素早かった。

猪狩は昔からのプロレス人脈をフル活用して短い間にこの試合を盛り上げる為の仕掛けを次々と成功させていった。

最初の一発目はマユツバ記事で有名なTスポーツの一面ジャックだった。なにしろ今をときめくマックス徳山の名が一面に踊ったので反響は結構あった。

その時の見出しがこれだ。

『マックス熊殺し！』

例によって語尾に小さく「？」マークが添えられているのだが、マックス徳山を知っている人間ならこの見出しを見て（本当に熊を殺しちゃったの？）と、軽く興味を惹かれるに違いない。そこで記事はこう続く。

『いよいよマックスが伝説に挑む！ 挑戦者は本物の熊。しかもただの熊ではない。あのグレート猪狩の一番弟子なのだ……』

読者はこの時点ではまだ（おいおいマジかよ）と、話半分にしか受け止めないだろう。熊がプロレスと聞けば誰だって本気にはしないが、具体的な日程が示されていたらどうだろう？

『試合は5月2日 S県F市民体育館 午後8時 ルールはプロレスと同様』

そして止めが証拠写真だ。マックスの写真と並んで掲載されたサンドバッグに熊パンチをお見舞いする熊五郎の写真！

これで読者は（マックス徳山と本物の熊がプロレスで真剣勝負するんだ！）と、信じざるを得ないのだ。

しかし、Tスポーツの見出しだけならさほど話題にはならない。そ

こは猪狩も分かっついていて、すかさず二の矢としてワイドショーをけしかけた。勿論、試合の結果いかんによってはマックスが結婚するかもしれないという情報をすっかりリークして。そしてそれは猪狩の計算通りだった。売れっ子タレントであるマックスの色恋ネタをワイドショーが放っておくはずがない。おかげでマックスは連日、マスコミの取材攻勢に悩まされることになってしまった。

さらに猪狩は熊五郎のHPを開設してネット上での露出を積極的に展開した。例えば、熊五郎ブログでは、熊五郎の「ガ！」というコメントに小次郎の訳がもれなくついてくる。その嘘っぽい訳は笑えるネタとしてネットでも好評を博した。大体、熊五郎がマックスの印象を聞かれて『胸毛の剃り残しがキモい野郎だ』などと答えるはずがないのだ。しかしネットの住人は熊五郎と小次郎のコンビを歓迎してくれたのである。またそんな具合で話題を提供すると同時に、熊五郎の人間味あふれる日常生活のユーモラスな写真や動画をじゃんじゃん配信することで「熊五郎」イコール「かわいい」という、女性のにわかファンの獲得にも成功した。おまけにテレビの生中継までが決定して、マックス対熊五郎の試合は瞬く間に注目の一戦となったのである。

* * *

テレビの生中継が決定したという新聞記事を読んでパンダマンが心配する。

「けど大丈夫かなあ。反響が大きい分、失敗したら大変だよ」
南大門も顔をしかめる。

「テレビ局もよく決定しましたね。生中継だなんてリスクが大きすぎですよ」

それを聞いて鬪子が猪狩を睨む。

「まさかまた『思い出のアルバム』で脅したんじゃないの？ テレビ局の偉い人を」

闘子は猪狩がマックスを昔の恥ずかしい写真で脅迫したのと同じ手を使ったのではないかと疑ったのだ。

しかし猪狩はまったく悪びれた様子も無く答える。

「いやそれは違うぞ！ 俺が使ったのは『友情のアルバム』だ！」
(やっぱり……… いったい何種類のアルバムがあることやら)

闘子はゲンナリした。が、これ以上は恐ろしくて聞けない。

しかし、どのような形であれ舞台は整った。運命の対決まであとわずか……。

* * *

闘子がひととおり道場の掃除を終えて一息ついているとアツシが声を掛けてきた。

「いよいよだね」

「……… そうね」

闘子のため息混じりに返事をする。

闘子の反応がイマイチなのでアツシは言葉に詰まった。ここ数日、闘子は元気がないように見える。大イベントを前に不安になっているのもあるだろう。が、アツシにはどうしても気になっていることがあった。

2人きりの休憩室にテレビの音だけが流れる。

闘子がぼんやりと眺めているテレビ画面では芸能レポーターがマックスの話題について、まるで自分が当事者であるかのように熱弁をふるっていた。

「で、ですね。この噂の女優はマックスが出演したドラマの競演者で……」

アツシは恐る恐る闘子の横顔を見る。画面を見つめる闘子の横顔はまるで切なさを胸の奥に仕舞い込もうとしているように見える。

「なあ……… 闘子」

アツシの呼びかけにも闘子は応じない。

やれやれと首を振りながらアツシは次の言葉を探す。正直に聞くべきか否か……。

「悩んでんのか？ マックスのこと……」

マックスという単語で鬪子が微かに反応した。

（やっぱりな）と、思いながらアツシが思い切って密かに考えていたことを口にした。

「もし結果が逆だったらどうする？」

「……え？」

「試合の結果。もし熊五郎が勝ったら鬪子はどうなんだよ。ガツカリする？」

「……それは」

「なら、こうしよう。もし、熊五郎がマックスに勝ったら……」

アツシが何を言おうとしているのかその真意が掴めずに鬪子は戸惑いの表情をみせた。

アツシは真顔で次の言葉を口にするタイミングを計っている。

まるで時が止まったかのように2人は無言で対峙した。その微妙な空間にテレビの音だけが背景のように淡々と流れ続ける。

「熊五郎が勝ったら……オレと結婚してくれ」

（は？）と、いった風に鬪子の目が見開かれた。

（これってプロポーズ？ 何考えてんの？）

啞然とする鬪子の顔を見てアツシが（やっちまった！）と、いう感じで苦笑いを浮かべる。

「い、いや、勿論、今すぐとかじゃなくてさ。その」

それを聞いて鬪子がようやくいつもの調子でアツシを睨んだ。

「当たり前でしょ！」

「だ、だからその、長期的な野望というか……大いなる計画の第一歩というか」

しどろもどろになるアツシの様子を見て鬪子が呆れる。

「……あのね」

鬪子とアツシは別に付き合っているわけではない。アツシの気持ち

はさんざん聞かされている。が、鬪子としては一度もそれにOKを出した覚えは無い。まったく心が動かされなかったといえは嘘になるが……。

「にしたって早すぎでしょ」

「ま、まあ。そうかもな」

「この歳で結婚とか……ていうかアタシの気持ちはどうなるわけ？」

「そ、それもそうだね」

「だいたい熊五郎が負けたとしてもアタシは嫁に行くなんて一言も言っていないし！」

「でも悩んでなかった？」

「それは！」と、言いかけて鬪子の顔が赤くなった。

「やっぱりな」

「そ、そんなことないわよ。だって相手は人気タレントだし……本気にする方がおかしいよ」

「じゃあ熊五郎が勝ってもいいんだな？」

「い、いいわよ。ていうか普通、そっちを応援するでしょ」

「どうだか……」

アツシが疑るような目つきでそう言うものだから鬪子はムキになる。

「熊五郎が勝つわ！ 絶対に！」

「オレもそれに期待してるよ。でなきゃ困るからな」

アツシと言い争いをしながら鬪子は思った。もしも熊五郎が試合に勝てば何も悩むことはないのだ。万が一、熊五郎が負けて、さらにゴン兄ちゃんが本気だというのなら、それはその時になって考えればいい。今から悩んだって仕方がない。

（今は……全力で熊五郎を応援しなきゃ！）

ようやく鬪子にも心の準備ができた。試合まであと3日……。

第八話　そして舞台は整った！

S県F市市民体育館。都心から電車で30分さらに駅から車で十分。そのロケーションは決戦の舞台としては少々物足りない。収容人数も約3500人。詰めれば何とか4000近くは入るかといったレベルだ。しかしこの対決、注目度という点では既に大イベントに匹敵するまでになっていた。マスコミを上手く利用した猪狩たちのPR活動は期待を大きく上回る結果をもたらしたのである。

5月2日。F市市民体育館の周りは異様な熱気に包まれていた。何しろ普段は学校の音楽祭かスポーツ大会しか行われなようなロカル・スポットなのだ。ここにテレビの中継車やマスコミ各社が集結している時点で地元は大騒ぎである。立ち並ぶ屋台、体育館の入り口から連なる人の列、チケットを求める者、それを高値で売ろうとする者。とにかく急に人口密度があがったF市体育館近辺にはちよつと異様なムードが漂い始めていた。

試合開始3時間前。会場入りした新日本グレート・プロレスの面々が言葉を失う。

「す、す、凄いつすね！」と、パンダマンが感心する。他の面々も普段とは違う会場の設備に驚きを隠せない。

戸惑う選手達に向かって猪狩が自慢する。

「どうだ？　これが一流のステージだ！」

「シャチョさん、あのデツカイ箱は何？　アチコチにイパイあるヨ」
そう言つてアシムが指差したのは巨大なスピーカーだ。

「照明も半端じゃないですね」と、南大門が唸る。

臨時的に増設されたライトが数十箇所、それらがリングに向けられている。さらに良く見るとテレビカメラがあちこちに設置されている。

猪狩を除く面々にとってこんな設備の中で試合するのは初めての体験だ。

ケンちゃんがにっこり笑う。

「今回は運営の為に外部の人間を雇ったから君らは試合に専念してくれ。音響も照明もみんなスタッフたちがやってくれるから」

何もかもがいつもとは違う。皆、改めて今回のイベントの重要性をかみ締める。

そこへ場違いなテンションの声が乱入する。

「いやはや。立派でんな」

緊張していた面々が振り返ると、いつぞやの金貸しが仲間を引き連れてゾロゾロと会場に入って来たのだ。

「いやゝさすが猪狩はんや。こりや成功間違いなしですわ！」

親分のフナ顔を見た途端、鬪子は不安になった。

「ひよっとして……また追加でお金借りたんじゃ？」

鬪子に肘を引つ張られた猪狩が当然だろうといった風に頷く。

「うん。いっぱい借りた」

それを聞いて鬪子が天を仰ぐ。

(ばっかじゃないの……)

すかさずフナ親分の仲間が次々と名刺を差し出してくる。

「よっちゃん・ローンです」

「ペンギン・ファイナンスです」

「にゃんにゃん・クレジットです」

そんな具合で、あっという間に鬪子の手が名刺で一杯になる。

(このバカ親父……いったい幾ら借りたんだろ？ 怖くて聞けない……)

猪狩と鬪子をぐるりと取り巻く金貸しの代表としてフナ親分が一言。

「なんとしても成功してもらわな困りますわなあ」

そして金貸し連中が一樣にいやらしい笑みを浮かべる。これはこれでかなりのプレッシャーだ。

ただし、猪狩だけは不敵な笑みを浮かべる。

「心配無用。必ず成功するさ」

猪狩と金貸し連中がお互いに気持ちの悪い笑みの応酬をしていると

ころにアルバイトの警備員が駆け込んできた。

「た、大変です！ 責任者に会わせろという団体が裏口に集結しています！」

猪狩が顔をしかめる。

「団体？」

「はい。保健所とか動物愛護団体とか……」

警備員の言葉を聞いて皆が不安そうな顔を浮かべる中、猪狩はやれやれと言った風に首を振る。

「保険証だか動物介護だか知らんが、まあ行ってみるか」

猪狩を先頭に鬪子たちもしぶしぶ裏口に向かう。

* * *

関係者出入口の所で騒いでいたのはF市の保健所の連中だった。

猪狩がこのイベントの代表だと告げると保健所の所長と名乗るいかにも神経質そうなおじさんが『安全第一』の黄色いヘルメットを被って半ばビビリながらまくし立てる。

「ワタクシはF市の保健所の責任者でしてね。ええ。なんでも猛獣を一般市民の前に出すと聞きましたね。ええ。」

それに対して猪狩が呆れる。

「何だお前ら？ その格好は？」

保健所の人達はなぜか全員ヘルメット着用。ただし白やら黄色やらバイクのメットやらで統一感は無い。さらにみんな防弾チョッキのようなものを着込んでいる。こちらは良く見ると溺れない為に着用する救命着、しかもご丁寧にF市市営プールと書かれている。

「当保健所としましては身体を張って市民を動物被害から守るという使命がありますもんで、ええ」

保健所の職員達はこれでも重装備をしているつもりらしい。もつとも野良犬を捕獲する網など持っていて役立たないような気がするが……。

「とにかく許可が無いと許しませんよ！ ええ！」
保健所の所長の言葉に猪狩が反応する。

「そうか。許可があればいいんだな。フフン」

そう言つて猪狩はケンちゃんに「あれを」と指示した。そしてケンちゃんが胸ポケットから紙を出して猪狩に手渡す。

「こういうこともあるかと思つてな。先に許可をもらつておいた！」
猪狩がよれよれの紙を広げて所長の顔に押し付ける。

その紙には汚い字でこう書かれてある。

「私は熊五郎を応援します。 厚生労働大臣 舟本浩」

しかも名前の横には年賀状に押すような芋版がくつきりと。

「どうだ！」と、猪狩が胸を張る。

紙を見せ付けられて所長が絶句する。

「こ、これは……」

そこはやはり公務員。上からの命令には滅法弱い。とはいえ、猪狩の持つ許可証の印は勿論正式なものではない。この印は、猪狩が大臣のところへ押しかけて押させたもので、実際は大臣が趣味で書いている日本画に押す為の芋で作ったハンコなのである。

が、オバカな所長にとっては十分、効果があつたらしい。

「く……ならば仕方ありません。しかし、少しでも熊が暴れたりしたら我々も黙つてはいません。しっかり試合を監視させて頂きますよ。ええ！」

そう言い残して保健所の連中はいったん引き下がった。

しかし、ほつとしたのも束の間。今度は入れ替わりに動物愛護団体を名乗る集団が猪狩たちの前にしゃしゃり出てきたのだ。

「ワタシは動物愛護団体『アニマル・ラブ』の責任者です！」

責任者と名乗るおばさんはこれまた神経質、というより神経痛を絵に描いたような人物だった。あまり近くに寄つて欲しくない種類の人間である。

「動物介護団体が何の用だ？」

猪狩が真顔でそう尋ねるので、おばさんは金切り声をあげた。

「キイツー！ 動物を介護するんじゃないやございませんことよ！ 愛護です！」

さすがの猪狩もこの手のタイプは苦手なようで渋い顔をする。するとおばさんは一気に持論をまくし立てた。

「だいたいですね。かわいらしい熊ちゃんにプロレスだなんて野蛮な行為を……」

おばさんの演説は5分ぐらい続いた。その間に「動物虐待」という単語が20回ぐらい出てきたが話の内容はまったく無かった。おばさんの話が途切れたところで鬪子が口を挟む。

「ていうか何が動物虐待？ 意味わかんないし！」

「んまあ！ 何さんしょ。この生意気な小娘！」

「はあ？」と、鬪子がおばさんに掴みかかるうとするのを選手たちが必死で止める。

それを無視しておばさんは横柄に尋ねる。

「そもそも。肝心の熊ちゃんはどこにいるぞますか？」

そこで、おむすび山が答える。

「会場のスピーカーにお尻こすりつけてマーキングしてる」それを聞いておばさんが目をむいた。

「んまあ！ マーキングだなんて！ 何てハレンチな！」

（ハレンチの意味がわかんないし……）

と、ズッコケながらも鬪子が辛うじて反論する。

「とにかく試合を見りゃわかるから！ 熊五郎は負けませんっ！」

「んまあ！ そこまで言うなら拝見するぞます。ただし、もしワタクシ共が納得できなければ許しませんことよ」

何とかおばさん連中を押し返したものの、どうしてこうも邪魔が入るのか鬪子たちには分からなかった。

（無事に試合できるかも分かんないのに。頭痛いなあ…… もう）

* * *

控え室のマックス徳山は準備運動に余念が無い。なにしろタレント活動の方が忙しくて格闘技の試合は久々なのだ。

そんなマックスを見守りながら童顔マネジャがブツブツ言っている。「まったく役に立たない連中でしゅねえ。結局、試合をするハメになつてちまいまちだよ」

試合を潰すという童顔マネジャの策略は失敗した。保健所も動物愛護団体も試合を止めるまでには到らなかつたのだ。

「しかしポクは超優秀なマネジャでしゅから準備は万端なんでしゅ！」

その言葉通り、童顔マネジャはボディガードを8人も雇っていた。それもみんな筋肉モリモリの外国人だ。

「さすがに名前が覚えられましえんね……あ、しょうだ！」

童顔マネジャは男達を上半身裸にすると各人の背中に油性マジックで大きく数字を書き込んでいった。

これでボディガード1号から8号までの出来上がりだ。

「これでよち。それではお願いしましゅよ」

「イエッサー！」

「あんしゃん達には高い時給を払っているんでしゅからね。相場の4.23倍でしゅよ！」

「イエッサー！」

「いいでしゅか。ポクが行けと言ったらマックスしゃんを命がけで守るんでしゅよ！」

「イエッサー！」

「熊なんて軽く捻り潰しちゃってください！」

「イエツ……サア」

「なんでしょこで声が小さくなるんでしゅか！」

素手で熊を捻り潰せと言われても流石にそれは無理というものだ。

「かあゝ情けないでしゅ。心配なんでフォーメーションの確認をしましゅ」

童顔マネジャは男達を一行に並ばせると練習の成果を試すことにし

た。

「しよれでは、まずフォーメーション「S」！」

童顔マネジャの号令で8人の男達が3 - 3 - 2に分かれてファイティング・ポーズをとる。

「もつとしゅばやく！ フォーメーション「M」！」

男達がざつと足を踏み鳴らして並び方を変える。

「続いて「A」でしゅ！ はい「P」でしゅ！」

童顔マネジャは調子に乗って陣形の確認を繰り返す。早く！ もつと早く！ とリズムを刻むうちになんだかエアロビ教室のようなノリになってきた。そのうちだんだん自分も興奮してきたようで童顔マネジャは意味不明な言葉を絶叫する。

「ハイツ！ フォーメーション S！ M！ A！ P！ シュマツピュ！」

マックス陣営は一応、準備万端なようだ……。

最終話 最強伝説！

6時の試合開始まであと30分。市民体育館の周りはますます凄
いことになってきた。

中の会場も熱気がムンムンだ。

控え室と会場のバックヤードを往復しながらそんな様子を眺めてい
た選手たちの緊張も高まる。いつもなら裏方の仕事でドタバタして
いるところが今日に限っては否が応でも試合に集中せざるを得ない。
そしてその緊張は最終ミーティングの席上でピークに達した。

お通夜の席上のように静まり返る控え室に猪狩の怒号が炸裂する。

「なんだお前ら！　なんで元気ねえんだ！」

そんな事を言っても猪狩以外の人間にとっては初めての
大舞台なのだ。緊張しない方がおかしい。

鬪子ですら震えが止まらなかった。

(何これ？　アタシが出るわけでもないのに……)

不安そうな顔で黙りこくる選手たちを見て鬪子は涙が出そうになっ
た。

自分たちの芸、もとい試合が果たして今日の観客に通用するの
か？　それは皆に共通する不安だった。今日の観客達は間違いなくマ
ックスと熊五郎を目当てに来場した客なのだ。

パンダマンが大きなため息をついて頭を抱える。

「ダメだ。緊張して。……今日は化粧のノリが悪いや」

副社長のケンちゃんですら緊張は隠せない。

「み、みんな。べ、ベストをつくらうよ」

それが「ベストを尽くす」の言い間違いであることは分かっている。
だが、誰もそれに突っ込む余裕すらないのが現状だ。

そんな悪いムードを変えようと鬪子が頑張って口を開く。

「み、みんな……大丈夫だって。いつもどおりやろうよ」

しかしその言葉は逆効果だった。

無理だよとでも言いたげな顔つきで選手たちが顔を逸らす。

鬪子はどうして良いのか分からずただ立ち尽くすしかなかった。

そこで突然、アツシが立ち上がった。

「なんすか？ みんな！ 元気出しましょうよ！」

鬪子が涙ぐむのを見てアツシは我慢できなかつたのだ。アツシはみんなに活を入れるつもりで高らかに宣言する。

「俺、やられますから！ 思いつきり！」

俺がやる、という宣言なら格好もつくのだがそこは万年やられ役の悲しさである。しかし、アツシには熱い思いがある。

「パンダマン先輩！ 思いつきり俺のパンツ噛んでくださいよ！

俺、目一杯半ケツ出して飛びますから！」

それを聞いてパンダマンが目頭を熱くする。

「アツシ……お前って奴は！ いいのか？ 本気で噛んでも？」

「勿論っす！」

2人のやりとりに勇気付けられた他の選手たちの目つきがみるみる変わっていく。

「おで！ がんばる！」と、おむすび山が立ち上がる。

「ワタシモ、ヤリマス！」と、ロマノフが腕を振りまわす。

アシムが、ハマドが、力強く立ち上がる。

元白熊君が犬のマスクを握り締めながら

「やれやれ。まったく熱い連中ダゼ」と、格好つけて立ち上がる。

皆の結束が固まった。

合言葉は「玉砕！」。

例えウケなくとも自分たちの試合を精一杯やる覚悟ができたのだ。

それを見守っていた熊五郎が「ガ！」と、声をあげる。すかさず小

次郎が通訳する。

「案ずるより生むが易し。お前らの骨は拾ってやる、と熊五郎は言っているべ」

(絶対、言ってるねえ〜)と、いつものような雰囲気に戻ってきた。

そんな様子を眺めながら鬪子がアツシに感謝の気持ちを目線で送っ

た。

それに気付いたアツシが笑顔で答える。本人はキラーンと白い歯を見せて笑ったつもりなのだろうが、キラーンと光ったのは手作りの王冠だった。相変わらずチープなハンサム王子のコスチューム。が、それでも今の鬪子にとっては立派な「王子さま」だ。見詰め合う2人。しかし時計は無情にも試合開始の時を告げた。

* * *

第一試合は「パンダマン対ハンサム王子」だ。黒のパンツに可愛い尻尾。白粉に目の周りを黒く塗ったメイクのパンダマンの登場に場内から失笑が漏れる。

一方のハンサム王子の登場も似たようなもので観客の反応ははっきり言って冷たい。

それでもアツシはいつもよりやる気マンマンだ。マイクを持って先輩を挑発する。

「おいっ！ このタヌキ野郎！」

パンダマンもマイクで反論する。

「タヌキじゃねえ！ パンダだ！」

そしてゴングと共に試合開始。

リング上で繰り広げられる闘いは迫力というよりはドタバタ喜劇に近い。

いつも通りパンダマンの攻撃にハンサム王子が逃げ回る。が、これもシナリオの内だ。ハンサム王子のヘタレっぷりに観客が呆れかけたところに「ハンサム・フラッシュ・ヘッドバット」が炸裂する！一応、「おお」という小さななどよめきが客席から聞こえる。

そしていよいよ最大の見せ場だ。

二発目を狙ってアツシがコーナーポストによじ登ろうとする。ポストに登りながらアツシはパンダマンに視線を送る。その目は（先輩！ 思い切り噛んでください！）と、訴えている。それに応えるパ

ンダマンの目も輝いている。

試合中の「アイ・コンタクト」それはどういつ試合であっても重要だ。

ガブリッ！

コーナーポストに登るアツシの尻めがけてパンダマンが噛み付いた！
「痛でえっ！」と、アツシが絶叫する。

なんと張り切りすぎたパンダマンはアツシのパンツだけでなく尻の肉まで噛んでしまったのだ！

それでもアツシは飛んだ。予想外の激痛に耐えながら……。

「あれ？」と、パンダマンの目が点になる。

観客の目も点になる。

パンダマンの口にはピンクのパンツがくわえられている。

ということはポストから飛んだハンサム王子は……。

客席の女の子が「キャー」と悲鳴をあげる。半分、喜色の混じった黄色い声があげる中、客席に笑いが広がった。

リング上で仰向けに倒れたアツシは（やられた……）と思いながらもまんざらではなかった。

股間はすうすうする。が、ハートはジンジン熱かった。

その時、アツシの中で何かが変わった。

「やった……ウケた」

パンダマンがとっさの判断でアツシに覆いかぶさりフォールの体勢に入る。

そしてさりげなく左手でアツシの股間を隠す。

レフェリーが1、2、3とリングを叩いてスリーカウント。

試合終了だ。予想外の展開ではあるが、掴みとしてはまずまずの立ち上がりだ。

続く第2試合は「おむすび山 対 南大門」だ。

短パンにランニングシャツ、そしておにぎりを詰め込んだリュック

をしょっておむすび山が登場する。そんな具合にどこかの画伯を連想させるおむすび山は、なぜか入場の際に観客に「おにぎり」を手渡して回る。そのパフォーマンスはケンちゃんの実況中継ではワイロを渡していると説明されている。が、観客にワイロを渡して何の意味があるかは分からない。

一方の南大門は得意の大道芸で観客を驚かせる。

お互いに試合とは無関係なパフォーマンスを繰り広げる2人の闘いは、もっぱら南大門が得意の凶器攻撃で主導権を握る。

「ああつと！　ここで南京玉すだれ攻撃だあ！」

一応、大道芸と連動した技で南大門が攻める。

で、ピンチになったおむすび山が好物の「おむすび」を食べて急激にパワーアップするというシナリオだ。

「おむすび山が両手に巨大おむすびを持って突進だ！」

おむすび山の渾身の一撃！　それは両手におにぎりを持って相手に体当たりして相手の口におにぎりを無理やり詰め込んでノック・アウトするという荒業だ。

「しかーし！　ここで南大門の火炎放射だあ！」

満を持して南大門が炎を吹きかける。

「ああつと残念。『焼きおにぎり』になってしまいましたあ！」

何ともマヌケな闘いである。が、これがこの団体の持ち味なのだ。

どのみちこの後の試合も似たようなものである。

第三試合では国際紛争と銘打つハマドとアシムの兄弟対決だ。

ここでの設定ではアシムがパキスタン、ハマドがインドを背負って戦うということになっている。実際の世界情勢で仲の悪いこの二カ国の代理戦争がリング上で勃発するということなのだ。

リングにあがったハマドがアシムを挑発する。

「お前の母ちゃんデベソ〜！」

するとアシムもマイクで応戦。

「母ちゃんが悪口言うなヨ〜兄ちゃん！」

そんな具合でマイクを持ったまま掛け合い漫才のノリで2人の兄弟喧嘩が始まる。どこが代理戦争なのだか、というグダグダな闘いである。

第四試合はパンダマンが扮する「犬マスク」と元白熊君が扮する「犬マスク・デラックス」のワンワン対決だ。

お互いマスクの額には「犬」と書かれているが正直どちらも可愛くない。一応、犬マスクが雑種の犬、デラックスがプードルという設定なのだがマスクの色と尻尾の形が違うぐらいしか差はない。この試合からは少しプロレス色が濃くなり、それなりに大技の応酬が見られるようになる。

そして準メインの第五試合で猪狩が登場する。対戦相手はロシアの殺人鬼「キラー・ロマノフ」だ。

「キラー」という単語はロシア語ではないという指摘をケンちゃんに受けつつも、ロマノフはなかなかの実力者で猪狩と互角の勝負をする。元はといえばウクライナで郵便配達をやっていた真面目な男なのだがリングの上では冷徹な殺人マシーンを上手く演じている。猪狩は猪狩で往年の技のキレは無いものの、そこはメインを張っていた根っからのプロレスラーである。試合のツボはちゃんと心得ていて、観るものを唸らせる。

ここまでの流れは悪くない。控え室のモニターで試合を観戦していた闘子がため息をつく。あとはメインの熊五郎がちゃんと試合をしてくれるかどうかだけだ。

闘子は祈るような気持ちで熊五郎の背中に手を添えた。

「お願いね。熊五郎……」

後は運を天に任せるしかない。

闘子の悲痛な面持ちに熊五郎が「ガ！」と、応える。

「任せとけ。大舟に乗った気持ちで見てろ、と熊五郎は言ってるべ」
小次郎の通訳に闘子は引きつった笑顔を浮かべる。

「大丈夫……だよな」

鬪子はそう自分に言い聞かせると、熊五郎の背中をぐっと押した。いよいよ決戦の時……熊五郎が闘いの舞台へ赴く。

猪狩のマイクパフォーマンスが終わった後、会場が真っ暗になる。「さて。いよいよ本日のメインです！」

会場のざわめきが自然と小さくなり会場全体がクライマックスに向けて息を潜める。

ケンちゃんの実況中継もいよいよ熱がこもる。

「人間はどこまで強くなれるのか？ どこまで進化できるのか？

その答えが今日、導き出されます。人類のプライドを賭けて。絶対に負けられない試合がここにあるっ！ 今や格闘技界、最強の男となったこの男。誰もが認める最強の格闘家。マックス徳山選手の入場ですっ！」

そして流れるはベートーヴェンの『運命』だ。

赤、青、緑の無数のレーザー光線が会場内を駆け巡り、やがて入場口に収束する。

バシューー！ という轟音と共に銀の紙吹雪が火山のように噴き上げられる。

それを合図に曲が一変！ 腹の底に響くような重低音が会場を支配する。

そしてマックスの「カモン！ チェキ」というラップがドラマの幕開けを告げる。

決して上手とはいえないマックス徳山の持ち歌『マックス・ハート』がスピーカーから大音量で流れ、その曲に合わせてマックスが登場！ マックスはボディガード1号から8号を引き連れて花道をステップ・バイ・ステップ！

赤の革ジャンに赤のパンツ。純白のシューズでゆっくりと花道を進

むマックス。

凄まじい数のフラッシュがマックスの入場を盛り立てる。

観客の盛り上がり方も凄い。ありったけの拍手と歓声と黄色い声がマックスに注がれる。

なかなか声援が止まない。耳をつんざくような歓声をなだめるように実況中継のケンちゃんが続く熊五郎の入場をアナウンスする。

「人は人。自分は自分。熊は熊。なぜ自分は熊なのか？ なぜゆえに熊としてこの世に生を受けたのか？ 彼は問う。己の存在意義を。そして人類に警告する。人間達よ。野生のルールを教えてやる。新しい世界を見せ付けてやる！」

マックスのファンから激しいブーイングが起こる。

「やはり大衆は人気者に味方するのか？ いいだろう。黙らせてやる。野生の王者が牙を剥く。ついにデビューだ！ 熊五郎選手の入場ですっ！」

そして流れるはドヴォルザークの「新世界」。

先程と同様にレーザー・ビームが観客をあおるように乱舞し、熊五郎の入場口に殺到する。吹き上がる紙吹雪！ それを合図に曲が途切れ注目の入場曲が大音量で流れ出した。

「ぽんぽん ぽんぽん」と、拍子抜けする前奏。続いて流れるまさかの楽曲！

かわいらしい子どもの歌声が響く。

「熊の子見ていたかくれんぼ」 おしりを出した子 一等賞」
何という衝撃！

会場内が一瞬で凍りついた。この恐ろしいギャップは観客のリアクションを根こそぎ奪い取ってしまう威力があった。

熊五郎の入場シーンを見て猪狩が満足げに頷く。

「どうだ。熊五郎にびつたりじゃないか！」

隣のパンダマンも「そうですね」としか答えようがない。

しかし、当の熊五郎は結構この曲を気に入っている。

熊五郎は、ゆるらゆる揺れながら曲に合わせてゆっくりと花道を進

む。

熊五郎に付き添いながら鬪子は肩身の狭い想いをしていた。

(何か観客の視線が痛いんですけど……)

物が飛んでくるんじゃないかとヒヤヒヤしながら何とか熊五郎をリングにまで誘導する。「バカ野郎」とか「ふざけるな」とか罵声を浴びせられる一方で、「可愛い〜」という好意的な声もあることはあった。

幸いにも熊五郎は落ち着いている。ただし、熊五郎がこの雰囲気呑まれて暴れだしたら大変なことになる。その為にセコンドとして小次郎がマイクを持って待機している。イザという時は童謡を歌って熊五郎を落ち着かせる作戦だ。

「いよいよ両者がリングの上で対峙します。人類VS野生。その歴史的な1ページ目が今ここに刻まれようとしているのですっ！」
時間は8時15分。テレビの生中継もすでに始まっている。

もう後戻りはできない。ありとあらゆるものを背負って熊五郎は闘わねばならないのだ。

「おっと、ここでマックス選手がマイクを持ったぞ！」

歓声がひと段落するのを待ってマックスがマイクパフォーマンスを始める。

「今夜は来てくれてありがとう。みんなの期待にこたえられるよう頑張るよ！ で、ここで重大な発表があるんだ」

マックスの言葉に会場が静まり返る。重大な発表とは何だろうと誰もが息を飲む。もしかしたらマックスがこの試合をもって格闘技を引退するのではという憶測は既にあった。それは十分に考えられるが、マックスの言葉は意外なものだった。

「この試合に勝ったら！ 俺、結婚しますっ！」

「ええーっ！」という会場のどよめきに合わせて鬪子も仰け反りそうになった。

(ま、ま、まさか、まさかよね？ そんな……)

鬪子は熊五郎と一緒にリングに上がってしまったことを後悔した。

が、とき既に遅し、マックス徳山はビツと指先を鬪子に向ける。

「そこにいる。彼女が結婚相手だ！」

またしても場内に只ならぬどよめきが湧き上がる。

(やっぱり……)

鬪子は熊五郎の後ろに隠れながら目を閉じた。

まさかマックス徳山がこんな手段で結婚宣言をするとは思わなかった。熊五郎に勝ったら鬪子を嫁に貰う。マックスの言葉は本気も本気、それどころか全国ネットで宣言されてしまったでないか！

(熊五郎！ お願いっ！)

心の中で鬪子は叫んだ。

が、肝心の熊五郎はといえば隣で歌う小次郎の「象さん」に酔いしれている。試合のことなどまるで意に介さず、相変わらずゆるらゆらと揺れている。

絶体絶命のピンチ！

(終わった……)

もうどうにでもなれという心境で鬪子は己の運命を呪った。

レフェリーが選手以外はリング下に降りるよう指示を出した。

赤コーナーのマックス。

青コーナーの熊五郎。

運命のゴングがついに鳴る……。

カーン！ ゴングの音が鳴り響き会場のボルテージは一気に頂点に達した。

が……やる気マンマンの赤コーナーに対して青コーナーのテンションは下がrippばなしだ。赤コーナーではマックスがいつでも来いよといった感じで軽いフットワークを刻む。

そのリング下では童顔マネジャ率いるボディガード達がいつでもリングに駆け上げられるよう待機している。

一方、青コーナーの熊五郎といえば、相も変わらずゆるらゆる。いまだにゆるらゆる揺れている。そしてそのリング下では頭を抱える鬪

子とのん気にあくびをする小次郎がセコンドについている。マックスは両手を広げて熊五郎を挑発する。

「さあ来い。熊衛門くん！」

やっぱりマックスは熊五郎の名前を覚えていないらしい。

やがて試合開始から5分。一向に闘う気配の無い両者。

始めはマックス・コールを送っていた観客の間にも「？」な空気が蔓延してきた。

「おいおい！ いつまでならめっこしてんだよっ！」と、徐々に客席からヤジが飛ぶ。

マックスは熊五郎の出方を待っている。

が、熊五郎は揺れている。

いつまでもかみ合わない両者。会場内にしらっとした空気が流れた。そこで何を思ったのかアツシが赤コーナー近辺にダッシュする。

そしてリングの下からマックスに呼びかけた。

「マックスさん！ これを！ これを持って熊五郎に見せ付けてやってください！」

そう言っアツシがマックスに渡したのは1枚のバスタオルだ。

「これが何か？」と、マックスが不思議そうにそれを広げてみせる。それは阪神タイガースの球団旗を模したバスタオルだった。

続いてアツシが指示をする。

「次にそれをクシャクシャにしてください！」

「こ、こうか？」と、マックスは半信半疑で言われるままにタオルを両手でもみくちやにする。

アツシの指示はまだ続く。

「で、それを地面に叩きつけてください！ できれば足でグリグリと踏みつけて！」

訳が分からないままマックスはアツシの言った通りにそれをやってみせる。

「何なんだよ。いったい……」と、マックスが首を捻る。

が、熊五郎は見ていた。その一部始終を……。

「ガ！ ガガツ、ガ、ガァー、ガツ！」

今までで最も長く熊五郎が吠えた。それは小次郎が翻訳するまでもなく、大好きな阪神タイガースを踏みにじられたことに対する抗議だった。

「ガー！」

熊五郎が短い両手を天に突き上げファイティング・ポーズを取った。ついに闘魂スイッチが入ったのだ！

それを見て赤コーナーで童顔マネジャが叫ぶ。

「い、今でしゅ！」

童顔マネジャの号令でボディガード1号から8号が一斉にリングに駆け上がり人間の壁を形成した。フォーメーションはMだ。

怒った熊五郎は身体をゴムマリのように丸めて……猛ダツシュ！人間の壁めがけて一直線に弾ける。

「ああっと！ これは正面衝突だあ！」

まるでボウリングのピンのようにボディガード達がスコーンと跳ね飛ばされる。

しかし、さすがは精鋭部隊。それでも必死で熊五郎にしがみつく。

熊五郎の首に正面からぶら下がる3号、足にしがみつく6号。4号と2号は左右からそれぞれ熊五郎の腰を抱え込む。

「ああっと！ これはいけません！ マックスのボディガード達が熊五郎を羽交い絞めにしています！」

しかし熊五郎のパワーは凄まじい。まず頭突きで正面の3号を叩き落とすと、足に絡みつく6号を踏んづける。さらに腰をクネクネ振って4号と2号を軽く吹っ飛ばす。正面から殴りかかってきた5号にはカウンターで熊パンチ！ ポストから飛んできた1号はハエ叩き、後ろから抱きついてきた7号には尻餅で応戦した。

最後の砦、8号は通せんぼのポーズを取って抵抗するが熊五郎はそれをバンザイ・ドロップでぽーんと景気よくリングの外に放り出す。

「強い！ 強すぎるっ！ まさに秒殺！ これが野生の厳しさなのかあ！」

小次郎が「イカン！」と、厳しい顔つきで叫んだ。
それを聞いて鬪子が青ざめる。

「ど、どうなっちゃうの?!」

「熊五郎のヤツ……ノリノリだべ！」

「そんなのん気なこと言ってる場合じゃないでしょ！早く、マイク、マイク」

鬪子が素早くマイクを拾い上げてスイッチを入れる。

「小次郎さん！早く歌を」

「あいよ」と、小次郎がマイクを受け取とる。

が、難しい顔でウームと唸る。

「どうしたの？小次郎さん？」

「うんにゃ、どっちを歌うべきかのう。チューリップと象さん」

「どっちでもいいから早く！」

それじゃあと小次郎が息を吸い込む。するとその瞬間、スポッと小次郎の手元からマイクが消えた。アツシがマイクを奪ったのだ。

「な、何やってんの！」と、鬪子がアツシを睨む。

が、アツシはマイクを背中に隠して駄々っ子のようにブンブンと首を振る。ここで止められたらせつかくの苦勞が水の泡だ。

そうこうしているうちにリング上では熊五郎がマックスを攻めたてている。

熊五郎は右に左に熊パンチ繰り出すものの大振りすぎて当たらない。マックスはヒラリヒラリと際どいところで身を交わす。さすがにそこは格闘王。その抜群の動体視力で相手の動きを見切っている。

南大門がリング下から声を張り上げる。

「熊五郎！ロープを使い！」

それが聞こえたのか熊五郎が動きを止め「ガ？」と、反応する。

そして、ハツシと、マックスの腕を両手で挟みこむとブウンとロープに向かって送り出した。

「へえ！」と、マックスは余裕の表情でロープに振られる。

「なんと！マックスがロープに振られたっ！」

マックスはトトツと小走りにロープ向かい、くるつと半回転。ロープを背にしてグイーンとロープを伸ばす。そして反動を利用して熊五郎のもとへトトトツ……。

すかさず熊五郎が片足を上げて熊キークク……。

スカッ！ やはり空振り！ クルツと短い足が天を仰ぎ、熊五郎は尻から落ちて後頭部を痛打する。コロんとすつ転ぶ熊。まるで絵本に出てくるみたいなシーンに観客が沸いた。

南大門が頭を抱える。

「そこは体当りだろ」

よりによって難しい技を選んでしまうとは……。

マックスは仰向けになった熊五郎を見下ろしながら観客を煽る。手拍子とマックス・コールを誘おうというのだ。真の力リスマは相手の攻撃を受けるだけ受けておいて最後の最後に反撃して勝つ。それは猪狩から授かった戦いの美学だった。

観客の期待が高まる。ここからがマックスの本領発揮だ。そして熊五郎がフラフラと立ち上がったところで満を持してマックスの攻撃が始まる。

「いよいよマックスが反撃開始だあ！」

まずは熊五郎に向かってダッシュ！

その勢いで両足を揃えて空中に浮かせる。まるで地を這うミサイルのようにマックスの身体と地面が平行になる。

「マックスのミサイル・キーク！ 決まったあ！」

マックスのミサイル・キークは的確に熊五郎の胸板を捕らえた。

が、ムニユっといった風にマックスの足が熊五郎の身体にめり込む。バランスを崩したマックスが墜落する。

普通ならマックスのミサイル・キークを食らった相手は後ろに吹っ飛ぶところだ。ところが熊五郎は「ガ？」と、胸のあたりをポリポリ。

怒ったマックスが肘打ちを1発、2発と熊五郎の肩口に打ち込む。さらに右足キックを連続で熊五郎の足、腰に5発お見舞いする。

しかし……熊五郎にダメージは全く無い。
啞然とするマックス。

場内の歓声は止み、どうなってんだ？ といったような空気が流れる。

実況中継も戸惑い気味だ。

「こ、これは……ひよっとして効いてないのか？」

リング上の時間が止まった！

そこですかさずアツシが叫ぶ。

「かつとばせえー！ 熊五郎！」

アツシの叫びが熊五郎に届いた。

熊五郎は両手でバットを持ったつもりでブンと素振りをする。

その瞬間、猛烈な風圧でマックスの頭が微かに揺れ、それと同時に何かフワツと宙を舞った。

「ま、まさか頭がちぎれた？」

マックスの頭を離脱した黒い物体は、まるでスローモーションのようにゆっくりと頂点に達し、まばゆい光線を一身に浴びながら、軽やかに着地した。まるで自らの存在を見せ付けるかのように、その物体は世界の中心で儼かな舞いを披露した。

誰もが息を飲む。

そして皆の視線がリングの中央からマックスの頭へ向けられる。

マックスはというと……茫然と立ち尽くしている。まるでフィギュア人形みたいなポーズで。

「う、嘘っ！」と、誰かが叫んだ。

「マジかよ」と、誰かが絶句した。

今、そこにあるもの。それは頭のとっぺんに見事な光沢を讃えたマックスのハゲ頭だった……。

ふと我に返ったマックスがまるで数時間ぶりに我が子を取り戻した母親のように跪いてカツラを拾い上げる。そして慌てて合体を試みるが時既に遅し。次の瞬間に場内は大爆笑に包まれた。

完全に戦意を喪失したマックスは頭を抱えてリングを降りるとその

まま逃走した。

はじめは笑いに包まれていた場内が徐々に静まり、やがてヒソヒソ声が、次第に怒りの声が大きくなっていった。

「何だよ！ もう終わりかよ！」

「金返せバカ野郎！」

「そつだそつだ金返せっ！」

あちこちで怒号が響く。そしてついには「金返せ」の大合唱に発展した。

段々、收拾がつかなくなってきた。堪らずケンちゃんがゴングを連打し、「勝者！ 熊五郎！」とコールするが観客の怒りは収まらない。一部の客がリングに殺到した。それにつられて保健所の連中や環境保護団体のおばちゃん達までリングに乱入する。

保健所の所長は猪狩に騙されたことを知って激怒し、動物愛護団体のおばちゃんはマックス陣営のやり方に怒って乱入してきたのだ。

さらには、どさくさにまぎれて借金取りたちまでが突入して、リングの周りは大混乱。

阻止する側と突入する側が小競り合い、罵り合って何が何だか訳がわからない状態になってしまった。

そんな中、リングの上は別世界だった。その中心には勝者、熊五郎とてもご機嫌な様子でゆるらゆる揺れている。小次郎が歌う「チューリップ」に合わせてゆるらゆる。リング外の喧騒など、どこ吹く風。

「さーいたあ」「ガ！」

「さーいたあ」「ガ！」

「チューリップのはーなーが」「ガ！」

それは勝利の雄たけびならぬ合いの手……。

そんな具合で熊五郎と小次郎のデュエットが続く。

「あーか すーろ きーいろ」「ガ！」

「どーの花見てもー きれいだべー」「ガッ！」

こうして世紀の一戦は収拾のつかない幕切れをもって終結したのである。

エピソード：My treasure

あれから数週間。良くも悪くも日本中の話題をさらった世紀の一戦は関係者に多大なる影響を与えた。

まずカツラがバれてしまったマックス徳山。

彼は歌って踊れるハゲ芸人として新しい境地を切り開いた。そのおかげでかえって仕事のオフアが増えたという。

一方、この一件でマックスのマネージャーを首になった童顔マネジヤは、同じ事務所の超わがまま女優のエリコ様の担当に任命され、試練の日々が続くこととなってしまった。

乱闘騒ぎは数人のケガ人を出してしまったものの誰が誰を殴ったというレベルのものではなく、結局、警察からの厳重注意で済んだ。

が、保健所の所長は左遷され、動物愛護団体のおばちゃんはさつさと鞍替えして環境保護団体を立ち上げた。

試合を生中継したテレビAの関係者は当然、厳罰が予想されたがその高視聴率によって処分は見送られた。

そして新日本グレート・プロレスは不幸中の幸いとも言おうか、何とか倒産の危機は免れたのである。

猪狩の無謀な計画のせいで借金の総額は膨れ上がってしまったが熊五郎の試合で得た収入と、その後の熊五郎人気のおかげで借金は徐々に返せる見通しとなったからだ。

今思えば本当に無茶苦茶な計画だったと鬪子は思う。しかし、得たものも大きかったとも思う。

流れ行く湾岸の景色を眺めながら助手席のため息をつく鬪子。

それを横目で見てアツシが尋ねる。

「どうしたの？」

「ううん。なんでもない。それよかちゃんと前見てよね。まだ免許取りたてなんでしょ！」

「わかってるよ」

そう言っつてハンドルを握るアツシの横顔を鬪子は改めて眺める。

「ね……前から聞こうとは思ってただけ」

「ん？ 何？」

「アツシは……なんでアタシのこと……」

「なんだ。言っつてなかったっけ？」

「聞いてないわよ」

「そっか。何でオレが鬪子に執着してるかってことか」

「執着つて……何かストーリーっぽいけど」

「そうかもな」

「え？ そうなの？」

「オレ……ずっと鬪子を見てたんだ。でも鬪子は気付いてなかった
る？」

「う……ゴメン」

「ハハ。やっぱそうか。でもさ。ホントにずっと見てただぜ」

「全然、気付かなかったけど？」

「オレさ。結構、長い間引きこもってただよね。で、2年の時、
久しぶりに学校行ったんだ。で、一日で嫌になってもう来るの止め
ようと思った時、鬪子の噂を聞いたんだよね」

「そ、そうなの？ アタシ、噂になつてた？」

「うん。プロレスラーの娘でゴリラみたいに強い女がいるって」

「ゴ、ゴリラ……」

ピクピクと頬を引きつらせながら鬪子が続きを促す。

「で？ その後どうしたの？」

「ずっと見てた」

「やっぱストーリーカー？」

「ち、違っつて。憧れてただよ。何ていうかさ。好きなことを一

生懸命やって何が悪いって感じて開き直っててさ。それがカッコ良く見えたんだ」

闘子は高校時代の自分の行動を省みた。が、そんな風に自分のことを見ている人間がいるとは夢にも思っていなかった。

「そうかなあ。あんま自覚ないんだけど」

「オレは見てたよ。F工業の番長を失神させたトコとか柔道部のストーカーを返り討ちにしたトコとか……」

「そ、そう。見られてたのね……」

「そんな闘子が好きなプロレスって何なんだろうって思った。で、気がついたら入門してたってワケ」

「ふうん。そうだったんだ」

「でも後悔はしてないよ。何かさ。入って良かったって思う」

「本当に？」

「ああ。やつと見つけたって感じかな」

「見つけた？」

「うん。宝物だと思ってる。だってこんなに毎日が楽しいんだぜ」

「そう……なら良かった」

闘子は心からそう思った。この商売は決して安定した仕事ではないが、アツシがそんな風に考えてくれていいるなら、まだまだやっていけそうな気がした。

闘子は（よし！）といった風に頷くとバンとアツシの肩を叩いた。

「そっか。じゃ、これからもがんばってね！」

「いって！ っておい。運転中だぞ」

「ゴメンゴメン。そうよね。あなたも大切な選手なんだから。ケガさせちゃマズイわよね」

「そうだよ。がんばって社長の借金返さなきゃなんねんだからさ」
借金の話が出たところで闘子とアツシが顔を見合わせる。そして、クスリと笑い合う。

「そういうことで」と、アツシ。

「これからもお願いね」と、闘子。

そして2人同時に「熊五郎！」と、同時にバックミラーを覗き込む。するとテレビ出演のために毛をブラッシングしてもらっていた熊五郎が後部座席でいつものように返事をした。

「ガ！」

【終わり】

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2056h/>

KUMA！ 最強伝説

2010年10月10日22時38分発行